

日本産学フォーラム リベラルアーツ企業研修会（第8回）
令和2年2月19日（水）於大手町サンケイプラザ 310号室

藤山：皆さん、こんばんは。きょうはちょっと集まりも難しいところ、ありがとうございます。民主主義のお話を聞きたいと思います。

どんな話題も、きょうのテーマに結び付けて考えることができると思うんですけども、今度の新型コロナ肺炎も、この対処の仕方っていうのを、どういうふうにやるのがいいのかっていうの、その背景に民主主義っていうシステムを持つてる国がどうやるのがいいのかとか、あるいは中国みたいな、かなりの中央集権が進んでいる、デシジョンが上から下ろそうと思えば下りてくる国はどうすればいいのかっていうような議論っていうのは、さまざまあると思うんですね。

私は2002年から2005年まで中国に駐在していて、SARSのときにぶち当たったんですね。SARSは、実は広州、香港で生まれて、北京に飛んできて、北京でウイルスが変異をして、致死率が上がったんです。全く、あのプーチンの大きな通りに人が、人っ子一人いないっていう北京になって。私が車を運転手に運転させて通っているときに、人が、防護服をまとった人につかまれて、黄色い救急車に押し込められて、どっかに行っちゃうんですね。あれ、やられたら、もうこいつらも生きていられないよなんて思って、非常に、背筋がぞっとした覚えがあるんですが。

その北京が。上海でもSARSが入ったんですけども、すぐに隔離をされて、発表して、鎮圧をしたんですね、早くに、SARS、上海は。ところが北京は病気がどんどんはやってしまった。これは後で考えていて理由があることでして、実は北京は北京市長の権限が上海市長とは全然違うんですね。力がないんです。というのは、国の機関が北京に全部集中してるんです。党の機関、軍の機関、病院もそうなんですね。党の病院、軍の病院。軍の病院とか、党の病院には北京市長が入れないんです。ですから、なんか変な病気があるだろう。いや、ありません。いや、あるはずだと聞いている。いや、ありませんっていうのを、2週間くらいやってたっていう時期があって。

王岐山っていう、今の、今度、天皇陛下の即位の日に来られた人が、もうそのときに既に、常務委員になる前かな、とにかく北京市長よりも上だったんですけども、北京市長になったら、私の知ってる北京人たちが、王岐山がなったんだから大丈夫だっていう、みんな、眉を開いて明るい顔になったのが印象的。そういうリーダーシップっていうのは、政治家の中に、庶民と政治家の間に、そういう関係があるんだなっていうのを、非常にそのとき、感じた覚えがあります。SARSのときの話ですけども。

きょうは民主主義。民主主義というのは、デモクラシーという言葉をもチーフにしてお話ししていただくと思うんですけども、歴史的にいろんな価値観を伴って、いろんな価値観で見られていたということがあるので、今あるデモクラシーに対する信仰みたいなも

のっていうのは、いったん忘れていただいて、歴史をきちっと頭の中に置いて、それでまたもう一回、現代を考え直すということ、先生に導かれて、知っていただけたら、いいかなというふうに思います。

きょうは、民主主義の日本の大碩学であります宇野重規先生においでいただいております。宇野先生は、東京大学の法学部の政治学研究科の博士学科を修了されまして、千葉大学の助教授であるとか、あとフランスとかコーネル大学に行かれてるんですけども、東京大学の社会科学研究所助教授が1999年ですね。それから2007年に准教授になられて、今、教授というふうになっています。

トクヴィルなんかも。私なんかは、トクヴィルなんかも、本を見て、非常に素晴らしい業績を収めているなというふうに感じております。だから先生の膨大なお考えはほとんど知りませんので、きょうは非常に楽しみにしております。

じゃあ、先生、恐縮ですけども、60～70分くらいというところで、お任せをいたしますので、よろしく願いいたします。

宇野：改めまして、宇野です。どうぞよろしく願いいたします。

一同：お願いします。

宇野：今、ご紹介の中にも王岐山っていう名前が出てきまして、ちょっとふと思い出したのでございます。王岐山っていうのは、今、ある意味でいうと、習近平の最も信頼する側近の政治家ということで有名ですが、私が最初にイメージを持ったのは、ちょっと違うルートでして。

先ほどご紹介いただきました、私、トクヴィルという『アメリカのデモクラシー』という本を書いた、有名なアメリカのフランス出身の思想家で、アメリカでいろいろ見て、『アメリカのデモクラシー』という本を書いた思想家の研究から出発しているんですけど。王岐山という人は、ある時期、トクヴィルに非常に熱心でして、トクヴィルを次々に中国語に翻訳し、政治局委員内で配っていくと。中国におけるトクヴィル導入の一番急先鋒は王岐山であるということでした。ほーと思って、面白いなと思って、なんでなんだろうなど、随分、思った記憶がございます。

この後でちょっと名前が出てきますけど、フランシス・フクヤマという『歴史の終わり』、『歴史の終焉』というショッキングな論文で話題を呼んだ日系のアメリカの政治学者がおります。この人とも、私、結構、何回かお目にかかって。あと、これは亡くなりましたけど、日本を代表する経済学者だった青木昌彦先生。この2人は、本当に青木先生が亡くなる数年前くらいまで、熱心に中国に通ってたんですね、2人で。フランシス・フクヤマと青木昌彦がいつも中国に行っていました。

それぞれ日本に帰ってきたときに、僕、お目にかかって、話を伺ってたんですけど、2人

とも結局のところ、いつも王岐山に呼ばれていて、いつもテーマはトクヴィルであるということを書いて。そうか。だから青木昌彦先生とかフランシス・フクヤマとか、この辺を呼んでは、王岐山はトクヴィルの話をしていたっていう、これはなかなか面白いなど、今にして思います。

ただ、どういうつもりでトクヴィル読んだのか。『アメリカのデモクラシー』を読んで、中国の民主化を考えてたとすれば、それはそれで大変素晴らしいと思いますが、あるいはむしろトクヴィルにもう1冊の著作がありまして、『旧体制と大革命』ですね。フランス革命になぜ至ったか。フランスのアンシャン・レジームといわれる旧体制はなぜ滅びたか。これの研究でもトクヴィルは有名なんですけど。あるいはどっちかだと。

要するに、中国の体制がいかにして、崩壊し再び革命に至るのをいかに防止するか、その策を学ぶために、トクヴィルから何かを得ようとしていたのかもしれないと、ややうがった見方をしてきました。

きょうは、ちょっとある意味で言うと、後で少しまとめますが、中国っていうのが、一つ、考える上での一つの鍵になるんじゃないかという予感がいたします。

民主主義というもの、これは言葉としては、もう2000年、2500年ですか、に及ぶ、長い歴史を持つ言葉であります。古代ギリシャのポリスと呼ばれる都市国家で生まれた言葉でして、後で出ますクレイステネスという人が改革をしたときに、デーモスという土地区分を作りまして、これに由来することです。ですので、それ以来、2500年になる長い歴史を持ちますが。

基本的に、これ、冒頭に申し上げておきますけど。民主主義っていうのはいいものである、あるいは少なくとも教科書的にはいいものである、取りあえず、法的にはいいものであると言わざるを得ないものであると、皆さん、もし思っただらっしゃるとすれば、これは割と新しい、極めて新しい常識でして、せいぜいここ、長くて200年、もっと短くすれば、100年ほどの常識にすぎない。もっと長い2500年に及ぶ民主主義の歴史のうち、大半の時期は民主主義というのは悪口であります。非常に否定的な意味で使われた言葉であります。

それが、ようやくこの20世紀くらいになって、民主主義という言葉、特に20世紀のアメリカですね。20世紀のアメリカは2度の世界大戦を戦うにあたって、どうやって嫌がる自国民を戦争へと促すか。

アメリカ人というのは、皆さん、ご存じのとおり、基本的にものすごくドメスティックな国民です。基本的には、世界のことは知らんと。アメリカ人の2人に1人は、一生涯、一回もアメリカを出ない人といわれています。非常にドメスティックな国民性のある国です。そのアメリカ人を、今からアメリカ人を引きずって世界大戦に導くにあたって、ルーズベルトは、いや、これはデモクラシーのための戦いなんだ、全世界とデモクラシーの対決が今問われているんだ、だから頑張ろうというように、アメリカ人を説得したわけです。

以来、アメリカがまさに20世紀の超大国になると軌を一にするように、民主主義というのは正しいものである、グローバルな上で、ある意味でいうと、非常な理想である、全人

類が、あるいは全ての国家が追い求める目標であるという常識が、約 100 年くらい続きましたが、この後、お話しするように、この常識は既に揺らぎつつある。特に近年は顕著である。

こうしてみると、中国という、古代ギリシャとは、本来、何も関係ありません。それが今や中国、それと古代ギリシャに端を発する民主主義というものが、ある意味でいうと、不思議な話で、結び付くようで、結び付かないようであり、非常に緊張をはらんでいる。フランシス・フクヤマ、あるいは王岐山、この辺りが、まさしくその辺を象徴している人物であろうかと思えます。ですので、きょうは後ほど、最終的には中国と民主主義みたいな話に、議論を皆さんと一緒にできればと思います。

それではレジュメに沿ってお話ししていければと思います。

私、これはちょっと脱線になりますけど、去年 1 年間、今もやってるんですけど、やっておりまして、2019 年冒頭に取り上げたのが、それこそ、フランシス・フクヤマの『政治の衰退』というものでした。先ほど申し上げたように、1989 年、ベルリンの壁崩壊に先立って、歴史の終焉、そして自由民主主義の最終的勝利、これをうたったフランシス・フクヤマが、今日、『政治の衰退』という本を書いているわけでありまして。『Political Order and Political Decay』というのが原題ですけど、日本語では『政治の衰退』という本を書いています。

あるいは、同じような時期に取り上げたのが、皆さまもタイトル聞いたことあるかと思うんですが、レビスキーという人とジブラッドという、『How Democracies Die』っていう、日本では『民主主義の死に方』というタイトルに翻訳されておりまして、これもだいたい話題になりました。

要するに、これまでであれば、民主主義を脅かすのは、その外にいる敵である。例えば軍の将軍であるとか、クーデターですとか。でしたが、今や、政治家自身、民主的に選ばれた政治家自身が民主主義を否定している。当然、念頭にあるのはトランプ大統領です。今や、内側から民主主義は否定されつつある。

あるいは、これも皆さん、聞いたことがあるかもしれません。ヤシャ・モンクという人の、日本語タイトルはやや救いがありまして、『民主主義を救え！』なんていう、割となんというのか、ポジティブなタイトルですけど、原題が『The People vs. Democracy』です。人々がデモクラシーと敵対しつつある。こういう本が世界的に話題を呼びましたし、日本でも次々に翻訳され、私、このような本の書評ばかりをやっていた。つまり、去年 1 年間かけて、民主主義は死にそうだとか、民主主義は危ないとか、人々は民主主義にそっぽを向いて動きだしてるとか、そういう類いの本ばかりを扱っているわけです。

これはでも無理はないかもしれません。もはや民主主義というのは、今や、どう見ても、うまくいっていないだろう。これも、このシリーズの、後ほど、6 月ですか、千葉大学の水島治郎先生をお招きして、ポピュリズムとは何かというテーマで、お話があるというふうに伺っております。ですから、ポピュリズムの時代。

水島先生の本を、今後、読まれるとよく分かると思うんですけど、よくポピュリズムと民主主義っていうのは、敵対的に捉えていらっしゃいます。民主主義なのか、ポピュリズムな

のか。水島先生の本は、ややそれと構図が違って、いや、この二つってというのは、もしかしたらセットだ。民主主義っていうのは、ある意味でいうと、ポピュリズムとセットであって、切っても切り離せないものである。従って、民主主義はいいものだけどポピュリズムはよろしくないとは、言いにくいものがある。つまり、ポピュリズムというのは、現代のグローバル社会の中での、ある種、経済的な意味での敗れた敗者、格差の被害者である人々が異議申し立てをしている。それは、そういった人々の声の表明であり、民主主義そのものであって、それ自身が悪いというわけではない。

考えてみれば、当たり前のお話です。グローバル化によってメリットを受けたのは、先進国の数パーセントのお金持ちと、インドや中国などの中進国、あるいは新興国と呼ばれる所のミドルクラスです。先進国の多くのミドルクラスは、むしろダメージを受けているわけですし、有名なエレファントカーブというのがありますね。要するに、このグローバル化によって経済のメリットを受けたのは、ごく数パーセントの先進国のエリートと、ゾウの体の部分に値する中国、インド。ここでは中産階級がすごい育ってるわけです。

だから、世界全体で見れば、決してグローバル化は一部のお金持ちだけではなくて、しっかりと中産階級を育てた。しかし先進国に限って言えば、明らかに中産階級、あるいは、そのやや下くらいは、深刻なダメージを受けているわけです。そして、先進国だけ見れば、そういった人々のほうが数が多いに決まっているわけですから。数が多い人々が異議申し立てをするというのは、これはごくごく自然、民主主義の率からいって、何らおかしい話ではない。

それが、現れたのがポピュリズムであるとする、このようにポピュリズムでは、今、先進国、イギリスのブレグジット、アメリカのトランプ現象をはじめ、吹き荒れているのは、これはある意味でいうと、民主主義そのものの影響といえなくもないというわけでありませう。

民主主義は大丈夫か。つまり、民主主義というのはミドルクラスがしっかりいて、世論がある程度、中心部に寄っているときはいい。その中で、やや右と、やや左とで、政権交代をするくらいはあり得るけど、右と左にブワッと分担化してしまうと、求心力がなくなるとすると、単に右か左の極端主義、エクストリミズムばかり出てきて、不安定化する一方である。そうになると、民主主義は持たないのではないか。そういう懸念が世界的に広がっている。

さらには、先ほどのヤシャ・モンクという人の『民主主義を救え！』というタイトルの本ですけれども、ここにショッキングな数字が本に出てきます。何かというと、世界価値観調査というのがございますが、これを見ると、アメリカの30代以下、20代、30代で、自由民主主義をあなたは信用しますかという問いに対して、そう思うと答える方が、3割を切っているということになります。アメリカの、それこそ70代以上を見ますと、7割以上が民主主義を信じている。つまり70代、80代というのは、戦争を多かれ少なかれ経験した世代とすれば、あの世代がアメリカのデモクラシーに対して、非常に強い信頼感を持っているとすると、今のアメリカの若者、しばしばミレニアル世代と呼ばれ、変革思考が強いといわれ、

多文化主義に対しても非常に親和性が高く、政治的な意識も高いといわれる今のアメリカの若い人ですら、30代の多くは、民主主義を信頼すると答えた人は3割に満たなかった。

ちなみにいうと、日本も同じです。今、日本で30代以下の方に、あなたはこの国の代表制民主主義を信じれるかと聞きますと、3割に満たないですね。7割は信用してない。民主主義の下に生きることに意味があるか。ないと答える方が、今や、日本でも若者の7割、7割がたが、そう言う。こうなってくると、いや、民主主義って本当に大丈夫ですかというわけであります。

このレジュメの中にもあるとおりです。この世界の独裁者っていう人たちですね。なかなか皆さん、いい面構えしてますけどね。あえて狙ったっていう感じもありますけれども。習近平も、もうちょっと人相のいいの選べば選べたんでしょうけれど。昨今のコロナウイルスの件もありますし、これもかなり、いろいろ我々としても思うところがあるわけです。エルドアンもいますし、金正恩もいますし、もちろんプーチンもいるし。何のことはない。今、世界の指導者の中で目立つ者は独裁者ばかりですね。いわゆる独裁的指導者といわれる人ばかりが、やけに目立つ。逆に、いわゆる民主的な国家といわれていた国々の指導者ほど、どんどん国論が分裂する中で、不安定化し、立場を危うくした。こうなってくると、民主主義なんて、もう駄目なんじゃないかという声が飛んでくるのも、やむを得ないところがあります。

という意味で、この中国ですね。中国というのは、いわば民主主義の歴史にとって、今や深刻な問いを投げ掛けているのではないのでしょうか。といいますのは、皆さんも政治学なり国際関係なり、いろいろ勉強されてきたときに、必ず教科書的には、こういうふうに書いてませんでしたでしょうか。市場経済と自由民主主義というのは、手に手を取って発展するものである。こういうふうには、どっかで学ばれたことはないのでしょうか。つまり、こういう理屈であります。

独裁者のいる独裁国家、つまり自由民主主義ではない国では、個人の所有権すら保障されない。為政者の恣意的な判断によって、市場のルールもしょっちゅう変わる。こういう不安定な社会では、決して経済は成長しない。従って、十分に市場経済を発展させるためには、自由民主主義の諸制度があつてこそである。従って、自由民主主義の制度があればあるほど、経済が発展する。逆もしかりだ。最初は独裁的であったとしても、例えば開発独裁といわれる国々ありました。フィリピンもそうでした。台湾もそうでした。じゃあ、ああいう国々でも、いったん経済成長が始まりますと、次第にミドルクラスといわれる人々が増えてきます。そして、やがてミドルクラスになった人々は、生活の自由を得て、やがては政治的な自由すらも求めるようになる。一定数以上ミドルクラスが育つと、その国は、やがて民主化する。

美しいストーリーですね。自由民主制だと経済が発展する。経済が発展すると自由民主主義を支持する中産階級がますます発展する。結論として、自由民主主義の発展と市場経済の発展というのは、手に手を取り合つて、お互いを加速するものである。今なお、多くの政治学の教科書では、そのように書いてあるのではないのでしょうか。

しかし、それが今、ちょっと、本当にそう言えるのであろうかということになってしまいました。ここに書いてあるとおりであります。

中国では、今、先ほど申し上げたように、ミドルクラス、中産階級が極めて増大しました。ものすごい数に増えた。今までの政治学の定理からすれば、当然、民主化するはずですよ。してないではないかと。むしろ、今、胡錦濤時代はまだ最終的には複数政党制を含む、欧米型の民主主義を中国もまた目指している、掲げておりました。いつかは中国も欧米的な民主主義を採用する。その際には、選挙に基づいて政党を選択すると、そういうのも未来の可能性としてはあると言っていました。それが習近平体制になって、そのような言い方は影が薄くなりました。そして皆さん、ご存じのとおり、中国モデル、これを強調するようになったわけです。

それは何を言われるかということ、大切なのは、人々の生活を安定させることなんです。そのためには、秩序を確立しなければいけない。そのためには、中国共産党の指導力が重要である。何も欧米的な民主主義を唯一のモデルとする理由は全くない。むしろ、中国の現在の体制のほうが、社会も安定し、政治も安定し、その下で経済が成長してるんだから、そっちがいいじゃないか。何も欧米型の民主主義をやったって、見ろ、ヨーロッパだってアメリカだって、ポピュリズムでどんどん混乱するばかりではないか。それに比べて、中国の場合は、非常に強力な指導者の下で、政治的には安定している。こうで考えれば、民主主義と市場経済の発展というのは、必ずしもセットではないんじゃないか。

むしろ現代のように技術変革が激しい時代、IT化、AI化が進む時代、皆さまもご想像つくとおおり、大きく制度を変えるときには、ばきっと変えないと、たちまち乗り遅れます。その際、民主的な政治的決定過程というのは、常に時間がかかる。ああでもない、こうでもない、そうでもない、いや、これで不利を受けるという人たちは必ず文句を言うわけですから、なかなか物が決まらない。ばっさりとした制度変更、難しいと思います。

そうだとすると、このように技術の変化が激しい時代においては、ある種、独裁的指導者がいる国のほうがいいんじゃないのか。そう考えると、中国のほうが、今やモデルじゃないかということが、いわれるようになってる。それが今日であろうかと思えます。

先ほどちょっとお話ししていたんですけれども、もうだいぶ前になりますね。何年か前ですけれども、各省庁の次官の方や、企業の社長の方やらが集まるオフレコの会だと思えます。ある省の次官の方がおっしゃいました。「いや、中国のような国と競争する立場に置かれている日本の立場からいうと、民主主義は常に正しい、それを擁護していく、し続けていく自信がない。むしろ独裁的指導者のほうが、こういう時代にはいいんじゃないか」と言いましたところ、企業の方は、企業の社長さんは大体、「いや、うちは、企業というのはトップが決断をして、それで動くんだ」、こういうふうにおっしゃるわけですから。企業のトップの方は、皆さん、どちらかというと、そうだね、変革の時代にはリーダーシップだよ。民主的に責任の所在が曖昧化してしまえば、やるべき改革できないということで、その場の雰囲気は、いやあ、民主主義というのは、もうどうだろうみたいな雰囲気に一気に流れまして。あ

の当時、私は、ちょっとやれやれと思ったんですけれども、今となってみると、なかなか示唆的な話し合いだったかと思います。

今、中国モデルは東南アジア、あるいは中東の指導者にとって、とても魅力的なものになっています。中国というモデルがあるじゃないか。必ずしも、欧米型の民主主義を導入しなくたって、社会秩序を安定し、経済の成長さえ続ければ、安定するわけです。それでいいじゃないか。

今まで、多くの国々が必ず最後は民主化、自由民主主義に変わっていくというふうにいわれていたんですけれども、今、そこから、それていくというイミ(00:27:48)が、次第に増えてきてます。最終的に、全ての国は自由民主主義へ至る。このような政治学の基本的な法則は覆りつつあるのかもしれませんが。

さて、これが、以上までがイントロダクションです。しかし、今、もうこの時点で議論に入っても結構なんですけど、きょうの趣旨は、そこで民主主義は終わりだという、ここで盛り上がるのが、私にとっての狙いではございません。待ってください。もうちょっと、そう結論を出す前に、少し、先ほど言ったように、少しじゃないんですね。2500年の時計の針を戻すわけですから、だいたい時計の針を戻して、そもそも民主主義ってなんであろうか。ここからもう一回考えた上で、その上で、民主主義が良いか悪いか、あるいは民主主義は維持できるかできないか、これ、ちょっと議論しよう。そのためにも、そもそも民主主義って何だ。これを振り返りたいというのが、きょうのお話の一番の主題でございます。

時は、紀元前8世紀であります。皆さまもよくご存じのとおり、これはアテネのパルテノン神殿であります。当時、現在でいえば、ギリシャ、あるいはトルコですね。この辺りはポリスと呼ばれる国々がたくさん登場します。面白い国家形態だと思います。どういうふうに面白いかといいますと、当時、チグリス・ユーフラテス川沿いにあったオリエントの諸王国というのは、大体において帝国でした。一番、皆さんもよく例えば耳にされてるとすれば、例えばペルシャ帝国。当時、強大なペルシャ帝国というのが、オリエント世界を支配しておりました。そのようなペルシャ帝国から見ると、周辺も周辺、端っこも端っこ、正直、申し上げた古代ギリシャというのが、決してこの時代の文明の中心では全くありません。むしろ周辺です。辺境です。

皆さんも、古代ギリシャとはいわず、現代ギリシャでも、エーゲ海なんかのガイドブックとかポスターなんかで見ると、青い海に白亜の神殿が立っていて、「ああ、ギリシャすてきだね」とおっしゃるかもしれません。しかし、あれがくせ者でして、なんであんなに青いんだろう。答えは簡単ですね。日本のああいいう魚がたくさんいるような海というのは、大体、黒く見えます。黒潮、親潮。あんなにエーゲ海の海が青いのは、ほとんど生物がないからです。魚が本当に取れない。

白い建物、すてきですね。白い建物。そしてオリーブオイル、ぶどう酒、ワイン、いいなとお思いでしょうか。オリーブとブドウが栽培される地域というのは、端的に言って、半砂漠であります。どちらも水がほとんどない所で、水を保つために、ああいいう半乾燥、半砂漠

地帯でも育つのがオリーブとブドウですから。あれは、要するにほとんど魚のいない、妙に透明な海に囲まれた半砂漠が、このギリシャの辺りでありまして。どう見たって、これが当時の文明の中心になんて思えないわけでありまして。ありていに言うと、貧しかったといわざるを得なかったでしょう。

この辺の古代ギリシャの国々は、一つ、面白かったのは、帝国を最後まで拒んだということです。地形もあるでしょう。山がちな地形です。統一するには、当時の軍隊の形式からいって、重装歩兵を使って、だーっと行進するわけですから、大平野なんかのほうが、巨大軍団を動かしやすいわけですから。ギリシャみたいに山がちな地形というのは、そういう大軍団を動かすには、あまりうまくない地形です。結果的に、小さな国々が分立いたします。この小さな国々のことをポリスということは、皆さんも世界史で学ばれたかと思います。いわば、このポリスというのは、軍人、戦士たちの共同体だということは、皆さんもよくご存じであろうかと思います。

この後も戦争を繰り返す中で、都市の中心部に戦士たちが集中する。集まってすぐに、このアゴラという丘に集まって、人々は議論を交わし、このようなアクロポリスという要塞を造って、それを都市の中核とする。そのような共同体のことを、ポリスと呼ぶというわけがあります。

なぜ、そんな話を今するのかと言われますと、皆さんに政治というものを考えていただきたい。政治。政治というものがあってこそ、民主主義です。民主主義の大前提は政治ですが、政治って英語で何ていいますかね。politics といいますね、英語でいうと。これって、よく考えると変じゃないですか。だって、politics って何が語源ですかっていったら、ポリスですから、固有名詞ですよ。今は、われわれは、だから politics とか政治っていうと、概念として捉えますが、本来、これは古代ギリシャ人がつくった都市国家のことを指す固有名詞です、ポリスって。それが政治となったっていうのは、変じゃないですか。もし民主主義が生まれたのが八王子であったとすれば、今頃、われわれは政治のことを八王子と呼ぶでしょうか。考えてみると、かなり変な話のような気がするんですが。

ある意味で、古代ギリシャというところのポリスというのは、何が特別なことだったか。ペルシャの巨大な都に比べれば、決して豊かとは言えなかったんだけど、ある種、独特な特徴があった。何か。このポリスでは、自由で平等な市民による、言葉というものを媒体にして、意志決定が出されるようになったからであるということでもあります。これもなかなか議論すると難しいところではあるんです。実際には、例えば女性がこの当時、ギリシャのポリスの市民にはみなされていませんでした。女性は排除されました。奴隷もいました。そして、アテナイって一番有名ですけども、商業国家であった。従って商業をやるのは、大部分が外国人、あるいは長期在留してアテナイに暮らすような外国系の市民でしたが、必ずお父さんがアテナイ市民である男の人しか、市民を持つ権利は与えられませんでした。そういう意味でいうと、決してオープンなものではなかった。

とはいえ、限られた範囲の男性市民の間においては、あくまで自由で平等である。そして

政治というのは何ぞやというと、力で人を押し切ることではない。お金の力で人々をたぶらかすことでもない。政治というのは何か。それは人々があくまで言葉を介して議論をし、結論を出し、その結論に強制されるのではなく、自発的に従う。これが政治だという理念が生まれました。

実際、これも後で、もし機会があれば申し上げたいと思いますけれど、ギリシャの政治家は大変だったと思いますよ。4万人、5万人、市民がいたといわれております。東京ドームに集まってるようなものですね。当時はこんなマイクありません。皆に向かって「おーい、みんな」とでも言わなければ、なかなか声が届かなかったでしょう。一つ間違えれば、みんな、わーわー、がやがや、ぐしゃぐしゃ言って、收拾つかなくなります。

今だったら、もう混乱して、みんなが大騒ぎしたら、警官隊でも導入できたでしょう。ところが、当時の古代ギリシャには、警官隊などおりません。職業軍人すらいない。軍人というのは、そういった一人一人の市民が自分たちで武器を持ったのが市民ですから。従って、そういう人たちが集まって文句を言われたら、彼らを鎮圧する軍隊なんかいないですよ。職業軍人なんかおりません。さらに言えば、今の政治家の方であれば、困ったら後ろから官僚の方がぱっとペーパーを出してくれますが、この当時は官僚もおりません。そういう状況で、周囲の議論を引っ張るのは大変なことだったとは思いますが、それでもなおかつ、広場に集まって、みんなで議論して、物事を決める、これが大切だった。

なんでかということ、人に強制されるものがない。自分で納得しているから、政治に従う。決定に従う。その条件は、自分も政治に参加しているから。こういう非常に独特な物の考え方をする人々が、古代ギリシャに生まれたわけであります。政治という言葉がポリスという言葉に由来するのは、それに基づくわけであります。

しかし、これは直ちに民主主義とはいえません。なぜかっていうと、最初の時期、それこそ広場に集まれるような人っていうのは、有力な人たちばかりでした。ごく貧しい人々は、なかなかそれどころではありません。生活が苦しいですから、広場に集まって議論をするなんていうのは余裕のある人で、普通の人たちは参加できませんでした。

ところが、面白いですね。ギリシャは、ポリスは次々に戦争したんです。これが結構、重要でして、戦争するたって、ギリシャのポリスの場合、職業軍人はおりませんから、基本的に一般市民が自分で自腹で金を払って武装して、戦争に参加します。そしてアテネ、アテナイなどというのは、スパルタと並び、有力ポリスへと成長します。そして戦争に勝つわけです。

何が起きるでしょう。俺たちは身を張ってるんだよ。自分の命を差し出して、しかもお金まで出して自腹で武装して、国のために戦ってるんだよ。その俺が、こう思ってるんだよっていうことを聞いてくれたっていいんじゃないですか。おまえら、兵士だ、死ぬだけでよい。それ、ひどいんじゃないの？という人々が、次第に増えてくるわけです。それこそ、皆さんもご存じのとおり、やがてアテナイはスパルタなどのポリスと組みまして、ペルシャ帝国と戦争します。勝ってしまったんですね。偶然だったかもしれません。遠征してきましたから、

ペルシャは。遠征して、弱ってるところを、やられたのかもしれませんが。しかし、ギリシャ人にとっては、もう大勝利です。

有名なのはマラトンの戦い。勝ったって言って、走って走って走って走って、42.195キロ走ってきて、「勝ったぞ」って言って、ぱたんと倒れて死んだとか死なないうっていう。あれがマラソンの起源になっているわけですが。あれなどは、やはり一般兵士の力なしには勝てなかった。さらに、サラミスの海戦という海戦がありますが、これに関しては、もっと貧乏人。自分で金出して武装するほどの金もない連中が、船の底に入って、えっさほいさと船をこいだわけです。そして、そのようなギリシャの軍艦がペルシャの艦隊に勝っちゃったんです。その結果、武装する金もない、あるのは自分の肉体あるのみ。船の底で必死になってこいでた連中が、「俺たちだって国に貢献してるんだよ」「俺たちの発言権認めてくれたっていいんじゃないの」と言いだしたわけです。これによって、次第にポリスの政治は民主化していくわけであります。

画期的だったのは、ソロンの改革と、クレイステネスの改革。ソロンの改革は何をやったのかっていうと、この当時、古代ギリシャも現在と一緒にです。グローバル化の時代だったんですよ。経済が成長します。その中で、だんだん貧富の差が拡大するんですね。ちょっと今の世界を思う上で、ちょっと示唆的なんですけど、一定程度以上、格差が拡大し、しかし民主主義の国でありますから、人々の兵士たちの声が発言権が大きい。何が起きるのでしょうか。

俺たち、身を張って国を戦ってる連中が、どんどん貧乏になってるの、ポリスは見殺しにするのか。それはないだろうという民衆の声を受けまして、ソロンという人は改革に向けて何をやったかという、債務奴隷の禁止です。この当時、負債を掲げた平民は最終的に破産しますと、借金のかたに、自分の体を、身体を奴隷としてお金持ちに提供せざるを得ませんでした。結果的に借金を重ねて、奴隷になる、転落する人が多かったんですが、これを全て帳消しにする。これをソロンの改革はやったわけであります。

要するに、市民というのは平等でなければいけない。従って、経済的にいくら貧しいからといって、そういう人たちをむげにしていけない。やっぱり民主主義のためには、人々の間に、一定程度、経済的な平等がなければいけない。少なくとも、極端な経済的格差があってはいけないという理念が、ソロンによって示されたわけです。

クレイステネスの改革は誠にさらに面白いです。ちなみに、この前508年が民主主義が生まれた年とされる年であります。なぜでしょう。この人は、クレイステネスは紀元前508年に不思議な改革をいたします。何をやったかといいますと、それまでは、アテナイというポリスは、四つの部族によって構成されています。4部族制でした。これを解体しまして、10のグループに再編したんです。というのは、教科書に書いてあります。そして、この新たに導入された新しい10の部族をデーモスと呼びます。従って、このデーモスという言葉に由来するのがデモクラシーである。従って、語源はクレイステネスの改革だといわれるんですけど。

皆さん、優秀な高校生だった時代、思われませんでした？ 4のグループを10に再編し

た。はあ、そうですか。それが民主主義と何の関係があるんですかと思われませんでしたか。でも、多くの教科書に、世界における民主主義が生まれたのは、この紀元前 508 年のクレイステネスの改革だといわれてるんです。変じゃないですか。4 のグループを 10 の部族に再編したら、なんで民主主義なんだ。これ、調べてみると面白いですね。

何のために、これ、10 部族に再編したかっていうと、まずは血縁に基づく共同体をぶっ壊す。伝統的な血縁に基づく共同体には、必ず親がね、名門の人がいる。貴族がいる。必ずそういう連中が牛耳る。だから、いったん解体する。血縁性はばらにして、完全に地割り、地縁に国を再編し直す。これによって伝統的な名門貴族の力を奪う。これが第 1 の趣旨です。

ここまでだったら、まだ驚かない。クレイステネスの改革はもっと徹底している。何かっていうと、当時のアテナイを都市部、山地区、海地区、三つに分けて、それぞれを 10 に分けるんです、まず。そして、都市部、山部、海部、それぞれ 10 個つくったやつを、1 個ずつ引っ張ってきて、組み合わせ、1 個のデーモスをつくったんです。なんでそんなことをと。答えは明らかです。特定の地域だけで一つの単位にすると、それはそれで、やっぱりその地域の顔役であるとか、力の強いやつ、主、地域のしがらみ、こういうのがあるから、これを徹底的に壊す。そのためには、海の 1 地区、山の 1 地区、都市の 1 地区を組み合わせ、新しい制度を作る。徹底してます。

要するに何かっていうと、いくら民主主義だ、対等だっていっても、地域で威張っている人、影響能力のある人がいたら、「いや、ヤマダさんがそう言うんだったら、私たち従いますよ」って必ず言います。本当に民主主義をやろうとしたら、地縁、血縁含めて、人々のしがらみを徹底的に解体する。ありとあらゆる社会的しがらみから解放して、初めて人は自由、平等に物を言える。真面目だった、その人たちは。本気にそう思ってたんですよ。

われわれは、自由で平等な市民が議論して決めるとか言ったって、またって言って。われわれは、やや、すれてますから、自由で平等な市民が言葉を介して議論を決定するとか言ったって、ああ、そんなこと言って。そんなことを言ったって、結局、裏で、顔役とか、エリートとか、ボスとかがいて、まあ、そうは言うけれど、うにやうにゃと言って、どっかで決まっている、そうされると思うんですけど、かなり古代ギリシャの人たちは真面目にやったんです。一切、地縁、血縁をばらす。同じような地域の人が顔を合わせないようにさせた。そういう人たちから抽選した人で、全部、交渉も決めた。

その次、驚きなんですけど、最終的にアテナイでは、全ての市民が参加する民会で決定したこと以外は、一切、決定はできない。それらの政治的決定は、民会で全ての市民が参加。全ての市民だって、全員が実際に来るわけじゃないですが、建前としては全ての市民が参加できる民会でしか、政治的決定はできない。裏を返すと、どっかの料亭に入って、やあやあとか言って、ここはこれで手をうちましようみたいなのは、絶対にやらせない。広場の下で議論して、票数までちゃんと数えて、そういう決定でない限りは、一切認めない。

2 個飛ばして、公職も、全ての公職は。皆さん、選挙って民主主義だと思ってるっしょる

と思うんですけど、選挙は民主主義でないというのが、古代ギリシャの発想です。選挙なんかやりますと、有名な人、優秀な人、そこまで言えないにしても、ある種の有名な人が選ばれちゃう。これは駄目。全ての人がランダムに公職に就くのでなければ、民主主義ではない。特定の有力者が、選挙を受けたから、自分は人々に代わって政治を行うなんて言わせてはいけない。徹底してますね。

そして、彼らは、やがては裁判権が。裁判というのは、専門の法律家がやるなんて言っているのは駄目だと。そういうことを言っていると、結局、法律的な知識を自分たちは持っているという連中が、基本的に、全てを牛耳るようになる。専門家の支配を許してはいけない。全ての人アマチュアでなければいけない。これが、まあ、古代ギリシャ人の思想なわけです。

そして、これも強調しなきゃいけないんですけど、厳しい責任追及がセットでした。これも涙ぐましいですね。古代ギリシャの、先ほどから言ってるソロンにしても、クレイステネスにしても、あるいはここにあるペリクレスという一番有名な指導者にしろ、ろくな末路はたどっておりません。みんないつかは必ずどこかで訴えられ、裁判にかけられ、有罪にされています。

公職に立つ人間はつらいよと先ほど申し上げましたけど、公金の支出において、後ろ暗いものはなかったか、変な人たちを桜の会に呼んでないか。そういうことを非常にチェックされまして、事細かに、それも時効がないんです。辞めた後ですら、何年かたって書類が出てきて、公金ちょろまかしたろうと出てくると、その人たちは追放、運が悪いと処刑されるんです。無限に責任追及される。一切の情状はない。

さらに、これも皆さん、聞いたことあると思います。陶片追放。オストラシズム。変な仕組みですね。みんなで投票するんですよ。誰々さん、1番です、人気でありました、良かったですね、おめでとうではないんです。みんなから票を集めて1番になると、はい、おめでとう、ハワイに行ってくださいじゃないんです。あなた、国外のどこかに追放ですから、出ていってください。こんな理不尽なこと、ありますか。みんなに投票してもらって、1番になった人は国外追放ですよ。

これ、なんでかっていうと、みんなから人気者が出ると、そいつは危険だっていう発想です。従って、人気者には出ていけ。ただし、別に悪いことをしたわけではないから、財産を奪うわけではありません。財産は保存されます。10年間、国外にいれば、帰ってくると、その間、財産は保障されますし、10年たてば帰ってくることは許されています。だから、決してその人をにくいというわけではなくて、単に人気者が出ると、そいつがいつかはクーデターを起こして権力を持ってしまいうだろう。従って、有力者が出るのを防ぐ。まあ、徹底した民主主義ですね。

私が言いたいことは、ここまで徹底した民主主義というのは、この後、結局、二度となかったと思います。現在、われわれは選挙を通じて、代表制民主主義のことを民主主義と呼んでますが、古代ギリシャ人だったら、鼻で笑うでしょう。そんなもん、民主主義じゃない。

選挙を使ってる時点で、民主主義じゃないでしょう。全ての人が、市民が平等に公職に就く。

先ほど言ったペリクレスですね。一番有力な指導者です。彼は、このような演説をしたことがあります。『たとえ貧窮に身を起こそうとも、ポリスに益をなす力をもつ人ならば、貧しさゆえに道を閉ざされることはない。われらはあくまでも自由に公につくす道を持ち、また日々互いに猜疑の眼を恐れることなく自由な生活を享受している』。紀元前5世紀のスピーチとは思えないですね。

明らかに、リンカーンのゲティスバーグ演説というのは、ペリクレスのやつのパクリでして、似てるんです。ペリクレスは、これ、ペルシア戦争で、軍人たちの葬式でしゃべったんです。みんな、よく戦ってくれた。でも諸君の死は無駄ではないぞ。何しろ、うちのアテナイの国はこんな自由な、いい国なんだ。君らは、こんな自由な国の民衆のために死んだんだ。だから君らは犬死にではないと、ペリクレスは演説をしました。

リンカーン大統領も南北戦争で多くの人々が死んだゲティスバーグで、諸君の死は無駄ではない、アメリカという国は、of the people, by the people, for the peopleの国だ、そのために戦ったんだ。完全に、あのとき、リンカーンがしゃべってる時、頭の中にあったのはペリクレスです。完全にペリクレスのまねをしたわけであります。まあ、でも逆に言うと、よくこんなスピーチを紀元前の世界でやったなと思われるだろうと思います。

民主主義についてのいい話は、大体、きょうはここまででして、後は大体悪い話が出ます。

第1弾、プラトン。早かったですね。アテナイ民主主義がうまくいったのは、ほぼ200年ほどといわれております。いや、200年も続かなかったかもしれません。もうプラトン。プラトンの時代は、まだアテナイの民主主義の最盛期です。にもかかわらず、プラトンは激しい民主主義者を批判したことで、よく知られております。例えばソクラテス裁判。

プラトンの師匠であるソクラテスは、先ほど出てきた民衆裁判によって処刑されます。理不尽ですね。ソクラテスはあくまでアテナイの青少年の魂のことを考えた。己にうそをつくことはない。己にうそをつかない生き方をしよう。ただ、そのように若者に向かって倫理的覚醒を訴えたソクラテスは、怪しげなことを言っている、若者をたぶらかしている、ポリスの神々を信じさせないようにしているなどという告発を受け。しかも彼は裁判に連れていかれるとき、何を言ったでしょうか。悪うございました、申し訳ありませんでした、今後、反省しますとでも言えば、あるいはもうちょっと情状酌量されたんでしょうが、ソクラテスは裁判の場で、こう言いました。「諸君、私にお金をくれ。素晴らしいことをやった。金メダルをあげよう。お金もあげようくらい言われてもおかしくないことを俺はやった。なんか文句あるか」みたいなことを言ったもんですから、みんなの怒りを買って、死刑になったんですね。

これにショックを受けたのが、弟子であるプラトンであります。自分の先生であるソクラテスみたいな立派な人を処刑させるような民主主義っていうのは、なんであるのか。単に数の多い連中が集まってきて、わあわあがやがや言って、そして何かを決定することというのは、どこまで正しいんだろうか。みんなで決めたからって、結論が正しいという保障には全

くならんではないか。極めてまっとうな批判ですよ。

哲人王と善のアイデア、これも皆さん、よく聞かれてると思います。ポリティアという『国家』という本の中に彼は展開しているわけですが、この話、詳しい話はいたしません。ただ、彼に言わせると、こういう理屈です。皆さん、アイデアといわれると、何のことだかよく分からんとおっしゃると思いますが、真理はあるってことです。

例えば皆さん、二等辺三角形っていうのをご覧になられたこと。ありますよね。

点って皆さんご存じですか。点。ばかにするなよ、俺は点くらい知ってるよと、おっしゃるでしょう。本当ですか。点、知ってます？ 見たことありますか？点って。あるよ。そこにあるって書いてあるじゃん。でも、これは点じゃありません。なぜですか。点というのは、位置と。場所と位置はありますが、面積はありません。ですが、これは黒丸ですけど、ちょっと面積がありますから、これは点ではないです。黒丸の黒円です。点というのは、位置と場所はありますが、面積はありませんから、見えません。じゃあ、ないです、点なんてのは。そんなことないですね、点はありますよ。

線はどうですか。線というのは、長さだけあります。幅はありません。ですから、線は見えません。でも、われわれは線はあるっていうけど、あれはみんな線じゃないです。見えるということは、実は幅がありますから。

つまり、この世の中には、点といい、線といい、本当の点もなければ、本当の線もないです。あるのは、何ちゃって点と、何ちゃって線です。ほとんど、最後、世の中にあるものというのは、みんな、何ちゃってっていう、いいかげんなものでありまして、怪しいものばかりです。

じゃあ、真理はないかといえば、あるでしょう。点がなくて、線がなかったら、幾何学なんてできませんよ。二等辺三角形、本当に数えて二等辺三角形っていうと、二等辺が完全に一致した三角形なんて見たことありますか。測れば、何々々々マイクロマイクロくらいになると、絶対に何か違いますよ。絶対、この世に二等辺三角形はありませんが、しかし二等辺三角形なんていうのはないっていうのは、これはばかげていますね。

プラトンは数学からスタートしてますから。そういうものだ。善もそう。みんな、この世に善があるかって言ったら、ないない、世の中、いんちきな連中ばかりだって言うだろう。でもそれは、俺は本当の二等辺三角形を見てないと文句言ってるやつと等しい。そのことは。本物の二等辺三角形を見たことがない、それはしょうがない、皆さん、この世に生きてるんだから。でも、そのことは、何ら二等辺三角形は原理的にあり得ないということは意味しない。それどころか、むしろ二等辺三角形はあるし、あるからこそ、幾何学の体系はある。

従って、本当の真理っていうのは、どこにもないけれど、あるんだ。単に、こういう肉体という牢獄に閉じ込められた魂であるわれわれは、それを見れない。感覚を通じてしか、俺は知ることができないから分からないだけで、アイデアはある。だとしたら、そのアイデアを実現すればいいだろう。

答えは、正しい答えがあるんだったら、みんなで議論して、何の意味がありますか。小学生だったら、「みんなでクラスで討論します」とか言うでしょうが、クラスで討論して、三角形の内角の和を議論したって、しょうがないです。「僕、210 だと思えます」「え、305 だと思えます」とか言ったって、しゃあないです。三角形の内角の和は 180 度でいいんですよ。決まってるわけです。こんなの議論したって始まりません。プラトンに言わせりゃ、そういうことなんです。

これゆえに、プラトンの民主主義批判というのは、いわば独裁の正当化であるといわれた由来であります。いかがでしょうか。このようなプラトンの批判は不当でしょうか。

時間の関係で、間を数千年、すっ飛ばします。急に最近になりました。

またこれも皆さんにぜひ伺いたいところですが、皆さん、アメリカに二大政党制というのがあるのはご存じでしたか。ふざけるな。んなことくらい知ってるわい。新聞、テレビ見てみる。民主党を共和党が二大政党だろう。知ってるよ。まあ、共和党はもうトランプで決定だけれど、民主党の大統領候補で、誰を選ぶかでもめているじゃないか。サンダースか。いろいろ言ってますね。でも、皆さん、不思議に思われたこと、ありません？ アメリカの二大政党は民主党と共和党。英語でいうと、Democrats と Republican。どこが違うんだ。

日本人の政治教育で欠けているのは、ここの部分でありまして、日本人の政治教育においては、民主主義と共和主義の区別がつかない。民主制と共和制の区別がつかない。誰に聞いても、共和制ってどういう意味ですかって聞いたら、共和制？ それは王様のいない国。皆さん、おっしゃいます。中華人民共和国だって、一応、王様いないから共和国。王様いるの？ いいですね。共和国っていうのは、王様がいない政治体制のことを共和国、あるいは共和制と呼ぶ。いいよ。じゃあ、民主主義は？ 民主主義も王様がいない体制。民衆が力を持つ体制。どこが違うんですか。違わないじゃないですか。同じじゃないですか。と言われると、日本人はみんなそこで黙ってしまう。

でも考えてください。アメリカでは、この二つの言葉が二大政党なんですよ。これが対立するんですよ。Democrats と Republican が対決してるんですよ。それも 100 年以上。つまりアメリカの定義においては、Democrats と Republican、あるいはデモクラシーとリパブリック、共和主義と民主主義、あるいは民主制と共和制というのは、違うもの。もっと言えば、対立するものと捉えているんです。これが日本人には絶対に分からない。ピンと来ないわけがあります。

あまり詳しい話は、もし後で質問が出ればお話ししますが。

ものすごく単純化して言わせていただきますと、デモクラシーというのは、言葉の語源からして、人々の力、民衆の力というものを意味するものです。最初、申し上げましたように、デーモスというのは、もともとはクレイステネスによって作り出された区割りのことを指すものですが、転じて、人々のことを指します。以来、デーモスという言葉は人々を指す言葉です。民衆を指す言葉です。しかも民衆のうち、平民とか。大体、平民というのは、お金がないですから、貧乏人が多いですから、金のない普通の人々の支配という意味が、デモクラ

シーという言葉には、抜き難く付いています。

結果としまして、デモクラシーというのは、しばしば多数者の利益と平民。民主主義というのは、多数者の利益、特に庶民、平民、お金のなさそうな人々。そういう人のほうが数が多いですから。そういった人々の声が政治に反映されることを、民主主義と呼ぶ。

これに対して、共和主義ってなんですか。共和主義というのは、言葉をたどりますと、ローマ、古典、古代のローマで、国を表した言葉が、レース・プブリカと申します。レースっていうのはモノ、プブリカは公共のという意味です。つまり、古代ローマ人は、自分たちの国のことを、公共のモノと呼んだんです。どういうことでしょうか。特定の個人や貴族や王様のために国があるのではない。社会全体の公共の利益のために、この国はあるんだというのが、ローマ人が己の国に付けた名前の理想であります。従って、今でも共和主義って、リパブリカニズムという言葉は、公共の利益を重視する政治という含意があります。

さあ、何を意味するか。つまり、多数者の利益か、公共の利益、どっちが重要だっていう話です。今の政治に、それ、何の関係があるんですかとおっしゃられると思いますが、今でも民主党というのは。クリントンさん以来、だいぶ変わっちゃいましたけど、もともとは、南部のっていうか、アメリカにおけるメインストリームから外れた人たち、北部よりは南部、白人ではなく黒人、資本家ではなくて労働者、あと東部出身者、ユダヤ人、どちらかというところ、社会の中で虐げられているマイノリティーの人たちが結集してつくられたものであります。基本的に、本来はお金のない、ごく普通の民衆の成功という含意があります。

ですから、かつては公民権運動で黒人の政治参加に対して非常に熱心でしたし、第2次大戦後は、さまざまな公共政策を通じて、人々に職がいきわたる福祉国家の推進に大変熱心だったのは、民主党です。要するに、人々、特に民衆の利益のためになることを政治を目指す、これが民主主義ということの含意。

これに対して、共和制というのは、デモクラシーというのは、結局、金のない、世の中の多勢の連中がわいわいがやがや言ってるだけだと。しかし、プラトン以来の理論です。数が多い連中が、わいわいがやがや言って、それが正しかったためしなかなないだろうと。多数者の利益が公共の利益とは限らない。多数者の利益は多数者の利益で、それはそれで部分集団の利益であって、金のない連中が、俺たちに名刺よこせて言ってるのが民主主義であって、国家全体、社会全体の公共の利益を目指すのが政治だろうというのが、共和主義という言葉に、ニュアンスとしてあります。

従って、これは、人がやたらめったら政治に参加すればいいっていうものではなくて、ちゃんとしたエリートが社会全体の公共の利益を冷静に計算して実現するほうがいいよという、こういう含意があります。

これは特にアメリカの建国期において非常に強く、アメリカの建国リーダーは、皆さんご存じのとおり、ワシントンにせよ、ジェファーソンにせよ、みんな大地主です。誰一人、貧しい労働者出身の大統領はいません。ずっと後、ジャクソン大統領だとかリンカーンとかが大統領になると話は違ってきますが、初期のアメリカ大統領は、全員、地主です。大金

持ちです。さもないければ、弁護士のような知的職業です。従って、彼らは非常に自分たちがエリートだという自負があります。

そして、彼らに言わせると、人々が政治に参加することはいいけれども、あんまりその人たちが言う、俺たちに金よこせ、飯よこせ、職をよこせみたいなのばかりに政治は揺さぶられてはいけません。政治というのは、ちゃんと知識もあれば、教養もあり、判断力もあるエリートが導くべきだよという思想を、彼らは持っていました。従って彼らは、慎重にリパブリカニズムとデモクラシーという言葉を区別しまして、デモクラシーが全ていいわけではないよということを、盛んに強調しております。やはりちゃんと選んだ、優れた人が統治しなきゃいけないよ。

今でもご存じのとおり、アメリカ大統領選、変な選挙制度ですよ。直接投票しないんですよ。州ごとに選挙人を選びまして、その選挙人が投票するという形式を取っております。あれがまた不思議な数え方して、また例のフロリダ辺りが、なんかかんだ、パンチの穴の開け方が悪いとか何とかで、えらい誤差を生み出してっていう、ひんしゅくな制度で、何のために選挙人制度ってあるんだと思いますが、これはアメリカの初期の建国の父たちの、ある種の偏見の表れですね。一般の民衆が直接大統領を選ぶとろくなものにならない。一般の民衆がやっていいのは、優れた判断力を持つ選挙人を選ぶところまで。選挙人はエリートであると。エリートたちが決めれば、大統領は間違いない。だから、一般民衆が直接大統領を選ぶなんて、そんな危険なことはやらせちゃいけないよっていうのが、建国の発想であります。

建国の父たちの思想が表すのは、『ザ・フェデラリスト』という本であります。有名な本ではありますが、ここにはかなり露骨な民主主義批判が展開されております。ただ、アメリカも面白いと思うのが、これも後で機会があれば、もうちょっとお話ししたいんですが、アメリカという国は、ある種、正直なところがあります。結局、世の中って、派閥ってあるよね。だったら、それはちゃんと認めようっていうことが、彼らにもありまして。重要なのは、派閥があるのがいけないんじゃないなくて、派閥が正々堂々と競争すればいいんだという思想が、フェデラリストには随分濃厚にありまして。

これで、党派っていうのはあってもいい。むしろ競争があって、一つの党派が政治を独占しないようにすればよいという、多元主義、プルーラリズムの発想がある。これは今日に至るアメリカ人の発想ですね。利益集団とか、ロビイングって絶対なんか言わないんです。やっていいんです。ただし、やるんだったら、正々堂々とやるし、競争しなさい。裏でこそこそしないように。一つのグループが独占しないようにというのが、アメリカ人の強調する点でありまして。この辺、アメリカ人は民主主義の国といわれつつ、民主主義という言葉にかなりひねりを加えたのが、私はアメリカ人だなと思います。

もう一人、だいぶ違う人が。うそですね。日本人は、先ほど言うけど、私は、アメリカに関して音痴だと思うんです。あまり日本人はアメリカの、特に政治思想がピンと来ないと思いますけど、ルソーはみんな好きじゃないですか。学校の教科書というと、中学生でもみんなホップズ、ロック、ルソー、習うでしょう。多分それしか習わない。ホップズ、『リヴァ

イアサン』。ロック、『市民政府論』、今『統治二論』といわれていますが、ルソーの『社会契約論』、終わりっという。

私、いつも学校の教科書、中学校とか高校の教科書書くんで、教科書会社に言うんです、「いいかげん、やめましょうよ、これ」って。他にも思想家いるし、『社会契約論』だけが政治理論じゃないしって言うんですが、駄目だって言うんですね。ホッブズ、ロック、ルソーだけは絶対に外しちゃいけないんです。これを外したら、全国の高校の先生が困ります。それくらい、どうも日本人に定着しているようです。不思議ですね。なんでこの3人なんですかね。他にも人いるんですけどね。

なかなかルソーっというの面白い人ですね。これも詳しくお話しする時間的余裕がなくなりましたが、ルソーという人は時代錯誤の人でした。彼は『学問芸術論』という本を書いてデビューするんですけど、何を書いたかっていうと、世の中の人には学問だ、芸術だ、文明だっって言ってるけど、そういうこと言うやつに限って、ろくなやつはいないっというんです。いい本ですね。みんなで学問やって、芸術やって、文明は素晴らしいっって本書くけど、そうじゃなくて、学問やって、芸術やって、文明とか言うやつにろくなやつはいないっというのが、ルソーのデビュー作でして。

なんでかという、やっぱり、学問とか芸術とかいうと、みんな教養を競うようになる。大体、そういうのはいんちきだ。大体、俺が俺がと言うやつに、ろくなやつはいない。私には才能があります、タレントがありますというやつに、本当にタレントがあったためしはない。大体、そういうのは虚飾であり、いんちきであり、うそである。そういう連中が、ばっこしているのが文明社会だという、実に鮮烈なるデビュー作を飾ります。かなり変な人だと思えます。

何が理想ですか。彼は古代ギリシャが良い、特にアテナイのような商業国家じゃなくて、スパルタのような武力国家がよかった。みんなスパルタ人のように、ひたすら戦争をやって、経済的利益とか商業とか、一切排除すると、素晴らしいという。時代錯誤の極みのような人ですね、本来、ルソーという人は。

ただ、この人には、そういう、ある種の正直といひましようか、面白い発想のところが一つ。彼は、後に本格的に政治に関心を持ちまして、『人間不平等起源論』という本を書き、なんでこの世の中に不平等があるんだという、あの有名な作品を出した。彼の結論はこうです。かつて全ての大地は全ての人に等しく開かれていた。ところがある日、とてつもなく愚かなやつが現れた。どういうやつかっていうと、いきなり土地に線をピーって引っ張って、くいをコンコンと打って、「ここ、俺の土地」っって言ったっという、大ばかものが出現した。これが人類の不幸の始まりだった。全ての大地、全ての自然は、本来、人類に共有のものだったのに、「これは俺の土地だ。入るな」とか言うばかな連中が出てきて、やがて、そういうばかな連中が国家をつくり、そういう国家は、そういう一部の金持ちのための利益ばかりを追求している。従って、今の政治体制は、全部、ぶっ壊さないと、みんな平等になりませんという。これも身もふたもないもといえ、身もふたもないんですけど、ある種の起

爆力のある議論を展開しました。

そして、彼は第 3 弾として、『社会契約論』を書いた。そして、これが一番謎な本です。彼は、これ、こういう問いを出しております。全ての人と結合して、しかも自分自身にしか服従しないことは可能か。面白い問いですね。人が 1 人でいれば、確かに自由かもしれない。しかしそれは単に孤独である。やっぱり人は他人と共に生きていく。他者と共に生きていきたい。他者が大切だと言った瞬間、今度は、その他者との関係がしがらみになる。自分を従属させる。えい、どうしたらいい。自由が好き、でもみんなと一緒にいたい。こんな私って我儘でしょうかというのが、ルソーの問いです。いい問いですね。

彼は目指したんです。みんなと一緒にいたいけれども、みんなと一緒にいながら、自分が 1 人であるときと同じくらい自由であることってできませんかっていう。いいですね。そんな答えはないに決まってるじゃないですか。でもルソーという人は、これを真面目に考えた。みんなと一緒にいるけれども、自分自身、1 人であるのと同じくらい自由であることが可能ではないですかという。彼が出した社会契約論です。

この答えは合ってるかどうか分からないです。彼、こう言うんです。全員で集まって、自分の体と財産を提供して、その政治体の意志決定に等しく参加して、その政治的共同体の意志決定を、結論を一般意志と呼び、この一般意志にみんなが自発的に従えばよろしい。みんなが決めたことに、自分も加わってみんなが決めたことに、自分も参加したんだから、その決定には従いましょう。これが社会契約であり、市民権であるというのは、うその答えです。

大変、きれいな答えですね。みんなが集まって、平等に集まって、平等の立場でみんなが議論をし、結論を下した。それを一般意志と呼び、その一般意志にみんなが自発的に従えば、人々は、人と共にいながら、自分自身の意志にのみ従って自由である。素晴らしい答えだとルソーは言ってるんですけど、素晴らしかったのかなって感じです、今からしてみると。

現代の民主主義論の迷走って、大体、このルソーに起源がありますよね。みんなが決めたこと、これが一般意志で、この一般意志にみんなが従ってるから、みんなが自由で平等だ。本当かねっていう。みんなの意志。一般意志というのが社会にはあるってルソーは言うんですけど、そんなのどこにありますかね。

ルソーはさらに怖いこと言ってますけど、一般意志に従わないやつがいたら、どうするんですか。強制すればよろしい。強制されてかわいそうじゃないですか。いや、強制されることによって、彼は自由になるんだ。一般意志に強制されることによって自由になる。かなり恐ろしいことをルソーは言ってます。

ルソーの言ったことってというのは、問いは素晴らしく新しい。全ての人と結合して、しかも自分自身にしか服従しないことは可能か。あったらいいねと思うけれど、その答えは社会契約である。全員が同時に市民であり、臣民である。みんなが一般意志を形成し、その一般意志に全員が等しく忠実に従う。

彼の思想はフランス革命に影響を与えたといわれていますが、これは現在ではかなり怪しいと思われています。そうですね。ルソーのようなかなり飛躍と混乱と、でも何ともいえ

ない素朴な問いと、新鮮な問題意識。これの持ち主って、意外にルソーというのは、答えではなく謎の人です。問いの人です。しかし民主主義を考えるとときに、このルソーっていうのは、一つ考えるべきポイントになるんですが。従って、現代のわれわれの民主主義論の、やっぱり一番大切な理論家は誰かって言われたら、ルソーだと思いますが、このようなルソーの議論には、直ちに批判が出ます。そこで自由主義です。

私が研究しているのは、このトクヴィルという人でして、あるいはこのトクヴィルと盟友、親友、どちらの呼び方もしちゃうんですけども、ジョン・スチュアート・ミル、『自由論』を書いたイギリス人ですね。フランス人、トクヴィルと、イギリス人、ジョン・スチュアート・ミルは、19世紀の自由主義を代表する理論家であるとして、皆さんもよくご存じかと思えます。

それに比べますと、冒頭のバンジャマン・コンスタンというのは、必ずしも知られていないかもしれませんが。なかなか面白い人です。彼はこう言います。ルソーというのは、いいやつだったかもしれないが、しかしあまり頭は良くなかった。ルソーは自由の心情は持っていたんだけど、自由の論理は分かってなかった。だから、ああいうでたらめな結論になったということを、彼は言ったんです。随分、思い切ったこと言いますね。こう言ったんです、彼。ルソーは、一人一人は自由であると同時に、他者と共に一緒にあるためには、みんなで一緒になって、一つの社会を形成して、一つの意志をつくって、人民主権によって政治を行えばいい。これはコンスタンに言わせると、論理の飛躍です。

コンスタンは、こう言いました。1人で物を決めるか、少数者で物を決めるか、みんなで物を決めるかっていうのは、それは確かに一つの論点だよ。民主主義っていうのは、みんなが政治に参加する。それはいいよ。しかし、それと個人の自由がちゃんと守られるかどうかは、全く別問題。1人の独裁者の下で、個人の人権が侵害される、これはよくあるね。少数の連中が政治を独占して、それ以外の連中をいじめる。これもあるよね。でも、さらに言えば、民主主義的な権力が個人の権利を侵害すっていうことだって、十分にあるんだよ。

つまり、権力の担い手が、1人か少数か多数であるかどうかと、その権力が個人の権利を侵害するかどうかっていうのは、論理的には全く関係がない。1人の権力が個人の侵害をするように、民主的な権力だって個人の権利を侵害することはあり得るでしょう。誰が権力か、主権者は誰かという問題と、その権力が個人の自由を脅かすかどうかっていうのは、全く関係がない。論理的には全く関係がない。なのに、純粋なルソーは、この二つをくっつけてしまった。みんなで物を決めれば、みんなの自由と権利は最も尊重されるはずだと思った。愚かだね。全くそれは論理的には関係ない。

みんなで決めて、個人をいじめることだってあるでしょう。クラスでみんなで、「さあ、これからヤマダ君をいじめましょう」「はい、そうしましょう」って言って、ヤマダ君以外の人全員賛成するということが、ありますね。クラスの総意で、みんなでヤマダ君のことを仲間外れにするなんて、往々にしてよくある話でして。みんなで決めたからって、その構成員の権利が守られたかどうかなんて、全く関係はない。従ってコンスタンは、ルソーはいい

やつかもしれないが、頭は悪い。なのに、みんな、ルソーに振り回されて、大混乱になっている。実におかしいというのがコンスタンです。

トクヴィルとミルは、もうちょっと上品な議論をしまして。トクヴィルは皆さんもご存じのとおり、民主的専制という言葉を作り出しまして、民主的な社会においても専制的な権利。例えば多数者の専制。世の中の多数者の人々が少数者を抑圧するということはよくあることだ。さらに自治や結社の中間なく、全ての権力に依存する民主的社会の人々というのは、往々にして、民主的な権力だったら何をやってもいい、民主的な権力だったら従うとって、全部権力にお任せをしちゃう。

かつてであれば、何か自分の身の回りで問題があったら、隣の人と相談して、どうかねって言って議論して解決したのに、ひとたび民主的な権力ができると、全て中央権力で決めてもらう。極論を言えば、家の近所で何か問題があったとしても、いちいち皆、管理会社くらいに電話かけるのは、まだいいですね。管理会社にかけて、「隣の人がうるさいんですけど、どうかしてください」くらいはまだいいけど、最近は警察いきなり連絡しますよね。「あの人、怒ってます。処罰してください」。こういうもんだと言うんです、トクヴィルは。

民主的社会になると。かつての社会の伝統的な封建制社会のほうが、まだ彼らは身近なことは自分たちで考えようと思ったけど、ひとたび民主的な中央集権国家が生まれると、全て中央権力にやってもらわないと、何も決められなくなる。住民間のトラブルですら、全部、警察に任せるようになる。これは駄目だと。従って、民主的な社会においても多数者の専制っていう、多数者の合法もあり得るし、民主的な名の下に権力が全てを決定し、個人の自由が侵害するということもあり得るだろう。

ジョン・スチュアート・ミルも面白い人ですね。これも、もし後で機会があれば、もうちょっと詳しくお話したいんですけど、彼はお父さんがベンサムという功利主義者の非常な支持者でして、若い時代から彼は功利主義者で、若きヒーローとして育ちます。もう 15 歳のときには有名人でしたから。新聞、雑誌に書きまくって、功利主義界、新星現る、もう大人気だったですから、15 歳くらいから。もうちっちゃいときから、もう父親から突貫のエリート教育受けまして。

ところが、もう彼、20 歳くらいのときに悩んじゃいます。俺の人生、これでいいんだろうか。俺の人生って、ひょっとすると、父親と姉さんの作り物じゃないだろうか。大体、俺は一生懸命、功利主義のために戦っていたけれど、考えてみると、その功利主義という理想は、親と姉さんにたきつけられただけじゃないだろうか。しかもよく考えてみると、功利主義って良くないんじゃない？ 最大多数の最大幸福っていうけど、世の中って多様でしょう。いろんな人いるでしょう。なのに多数者の利益ばかり尊重されたら、ひどい目に遭わない？ 功利主義者はこういう大勢の効用を最大とする。社会全体を社会最大多数者の効用を最大化する。それが社会にとって正しいのだからって言うけど、んなこと言える？ 多数者の利益は最大化しているかもしれないけれど、世の中、多様なんだから、そんな利益って測

れるわけじゃないから、数量で。人にとっては、世の中の人って見ると、このほうが効用は拡大してるっていったって、俺は嫌だっていう人、世の中いるでしょう？ そういう人たちが、最大多数の最大幸福なんだから従えとか言われたら、悲惨じゃないですか。

従って、彼は極論に、ある意味で極論ですけど、危害原理について、他人に危害を加えない限り、何やってもよろしい。そいつがやってることが、仮に愚かだ。これを愚行権といいます。愚行であっても何でも、そいつがやりたいというものはやらせろっていう、これが自由主義の大厳密なんです。

ほとんど、さように、みんなこれ、19世紀の思想家ですけど、民主主義って、そんなに個人の自由と相性良くない。個人の自由は、しばしば民主主義の下で侵害受けるよ。だから、この両者を両立させようと思ったら、頭を使わなきゃいけないねというのが、19世紀の思想家たちが提起した問題であります。正直申し上げて、今日なお、その問題、あんまり解決してないですね。自由民主主義なんて簡単に言うから、話をごっちゃになるんでして、コンスタンのように、自由主義と民主主義は本来違うんだと言ったほうが、ある種、すっきりするかもしれないですね。

さて、20世紀です。もうこれは、既に先ほどお話しした内容です。長らく悪口であった民主主義が、20世紀に一気に自由を掲げた言葉となります。それはアメリカが2度の世界大戦に参加するにあたって、戦争の大義として、デモクラシーという言葉掲げたからであります。

しかしながら、同じく20世紀、二つの世界大戦でナチスドイツみたいなファシズムなどがあつた時代であります。中でもナチズムは民主的な選挙を通じて、あの民主的なワイマール体制の中から生まれてきたヒットラーが、独裁体制をつくった。そのヒットラーの独裁を、少なくとも民衆は積極的に抵抗しなかった。むしろ支持したんじゃないだろうか。そう考えると、選挙権が拡大したのはいいだろう。2度の世界大戦を通じて、確かに選挙権を拡大した。結構なような気がするが、世の中の多数者というのは、必ずしもまともな判断力を持っているとは限らない。昔からある民主主義批判です。

それを考えると、みんなで決めたことだからいいことだとは、とても言えないという議論が、実は政治学を読んでいると、そういう議論ばかりです。例えば有名なのがシュンペーターですね。皆さん、シュンペーターというと、イノベーション、イノベーションが先走って経済学者として有名ですけど、彼は民主主義論家としても、非常に重要な仕事をしています。特に彼はエリート民主主義を展開しました。どういうことを言ったのか。

民主主義は認めよう。いまさら民主主義を否定するっていうのは、いくら何でも時代錯誤である。しかし、民衆が正しい政治や正しい政策を知っているわけではない。もうそれは20世紀、特にその前半の悲惨な経験をしたわれわれも、よく知っているだろう。世の中の人には政治になんか関心もなければ知識もない。考えてもいない。ああいう人たちに政策を論じろなんていうのは、そもそも無理だ。とはいえ、民主主義を否定するわけにもいかない。

ならばどうしたらいいかっていうのは、シュンペーターっていうのは、こう言ったんです。

人々は選ぶ力はある。何を。正しい政策を選ぶ力はないが、誰が正しい指導者かは選べるだろう。従って民主主義というのは、人々が政治を決定する仕組みではなくて、誰が政策を決定するか、その誰かを決定するのが民主主義だ。従って民主主義というのは、まっとうな知識を持って政治を行うエリートたちを選ぶところまでに限定されるべきであって、そのエリートたちが決定する内容までを民衆が決めるべきではない。こういう議論であります。ひどい議論だと思われるかもしれませんが、まあねって感じですね。

特にシュンペーターは強調しまして、何が肝心かっていうと、人々が正しいエリートを選ぶ力があるってというのは、実は怪しいかもしれないって、彼は言うんです。じゃあ、なんで。なんであんな選挙なんかやるんですかという、エリート間で競争があるほうがよろしい。エリート間で競争があると。一つのエリートがずっと支配をすると、大体おかしくなる。みんな競争していれば、常に最悪の事態を避けられて、むしろ政治的には少しずつ良くなっていくかもしれない。従って、選挙というのは、正しい結論を出すかどうかは分からないけど、常にエリートたちに権力の座に居座らせることを防ぐのが目的だと。常に権力を奪われるかもしれない。ライバルが出現するかもしれない。常に緊張感がある状況に政治家と政党を置くことに、民主主義のポイントはあります。逆にいえば、それに尽きる。それ以上に民衆が政治に参加すると、ろくなことにならない。

身もふたもない言い方でありましてけれども、シュンペーターの政治理論というのはこういう形です。果たしてわれわれはそれを否定できるでしょうか。そんなひどい議論はとても認められないといえるでしょうか。

対する極にはハンナ・アーレントがあります。これは映画にもなりました。随分人気になりました。面白い人です。不思議な人です。私、非常に好きですけども。彼女の理論を説明するのは容易ではありません。一言だけいうと、彼女はそれでも政治は大切だ。政治とは何か。やっぱり古代ギリシャに戻ろう。人がちゃんと他の人間を認めて、一人一人違う人間なんだねってことを認めた上で、言葉を通じて、みんなで物事を話し合っていこう。そして意志を決めていこう。それは正しい答えが常にあるか分からないけれど、人間にとって意味があることだ。人間が常に物だけ相手にして、他の人間としゃべらなくなったら、どうなる。人間が人間たるゆえんは、自分とは違う人間たちと共に暮らしていく。あなたはそうだね。私は違う。でも一生懸命、違う人間同士が話し合ったり、議論したり、そして一緒に生きていく。これが政治でしょう。

これは、そのとおりっていえば、そのとおりです。だから、ハンナ・アーレントは選挙だけやってちゃ駄目なんだ、エリートに政治は任せちゃいけないんだ、普通の人が政治の場に参加して、自分とは違う立場の人たちと議論を交わしていくのが大切なんだ、そこからタレントを引っ張ってきて、参加民主主義を擁護する議論も今日根強くあります。今日の民主主義論は、ある種、正論状態ですね。混乱ですね。なかなか結論は出ません。

そのうち、フランス・フクヤマのように、おっちょこちょいな人が、自由民主主義は勝利したと言っちゃったりするんですけど、そのフランス・フクヤマが、あれから 20 年

もたないうちに、いやいや、今、政治が衰退してるとかいう本を書いちゃうわけですね。これが現在のある種の問題状況です。

ここにあるようなことは、以下、皆さん議論していけばいいことです。民主主義は本当に人類の普遍的理念でしょうか。仮に民主主義はいいものだとしても、相当条件を絞らないと、うまくやっていけないんじゃないでしょうか。民主主義だって、古代ギリシャ人はみんなが集まりました。選挙で代議制民主主義を本当に民主主義と呼べるでしょうか。古代ギリシャ人が言ったみたいに、政治に参加すると同時に、ちゃんと責任を追及することが民主主義だ。この辺りにも、今、われわれが民主主義を考えるヒントがあるんじゃないでしょうか。この辺りのことを、以下、議論していきたいと思います。

すいません。ちょっと長くなりました。以上です。

藤山：ありがとうございます。

大変、楽しく聞かせていただいたわけですが、この最後に、掛けていただいた問いそのものでもいいんですけども、今までにまず本を読んできていただいて、問いを立てられているのがありますね。これを例によって、ちょっと後のほうにしまして、今の、きょうの先生のお話の中から、自分が感じたこと、あるいは最後にの問いの中で、自分が思うこと、これ、いずれもそう簡単に結論が出るわけではないんですが、感じたことを、まず述べていただきたいと思います。

きょう、ちょっと人数少ないので、1人2周りくらいができるかなというふうに考えておりまして。最初のセッションのほう、お話をさせていただければいいかなと思います。では、どなたからでも結構です。手を挙げていただきたいと思います。どうぞ。それで、お話しする前に、所属とお名前を言ってください。

はい、どうぞ。

磯部：日産自動車の磯部と申します。どうぞよろしく申し上げます。

まず最初の切り出しは、ちょっと紀元前まで話をぎゅっと戻させていただきたいと思っただんですが、そもそも古代ギリシャでは、なぜここまで徹底することが必要だったのか、あるいはできたのか、その陰には、相当、やはり腐敗とかそういったものが進んでしまった、なんですか、対策として、こういうふうになったのか。なんかそこら辺の背景があったら、教えていただきたいと思います。

宇野：ありがとうございます。非常に重要な問いでありまして、なかなか一言で答えるのは難しいと思います。

先ほど申し上げましたように、実をいうと、古代ギリシャの民主政治、民主主義というのは、最盛期というのは極めて短く、西洋のソロンの改革、あるいはクレステネスの改革から100年、ペリクレスくらいまでかなっていう。その間につきましても、実はほとんど安定

しておりません。きょう、ちょっとレジメに書かなかったんですが、参考図書のほうには出てると思うんですけども、僭主、ティラノスという古代ギリシャ語でして、現在の英語でいう tyranny という言葉がありまして、専制とか、王政だとか、そういう言葉で訳されています。この僭主というのは、次から次へと現れるんですね。この僭主って何者かといいますと、ある種のカリスマ的指導者です。カリスマ的な指導者ではあるんですが、一般に人気がある。だんだん独裁者になっていき、民主的な制度を全部停止して、事実上の独裁体制をつくる、こういうタイプの指導者が、次から次へと現れたのが古代ギリシャの時代です。僭主、tyranny、英語でいうと tyrant とか、これが次々と現れたのが、古代ギリシャの民主政治の歴史であります。

これなんでかっていうと、うまく想像つくと思いませんか。民主的な時代において、やっぱり政治において人気者って現れますよね。人々のカリスマ的な人気を。カリスマ性を持って、みんなの人気を一身にみまっけて、結果として、俺は人々からも、民主的支持を受けたんだから、俺の決定がみんなの決定だというようなことで、俺に逆らうやつは人民に対して敵対してるんだとって、事実上、独裁者になるというのは、どう考えても、2000 年以上前の昔の話じゃなくて、今の日本だって、十分にあり得そうな話です。こういった指導者が次から次へと現れちゃったんですね。

そのたびに、ギリシャ人、迷うんですよ。いや、確かに、こいつ、独裁者でやり過ぎなんだけど。例えば、ペイシストラトスなんて有名な僭主がいます。有能なんですよ、大体、そういう人って。ですから、ごく短期的には、彼にやらせたほうがいいんじゃないか。ちょっと独裁でやり過ぎだけど、有能だし、やること間違いないし、危機の時代には、ああいう人にやらせたほうがいいんじゃない？って、今でもありそうな。冒頭で話したようなこと、みんな思って、やらせちゃうんですよ。ところが、そういった僭主の支配っていうのは、長期化すると、だんだんひどいことになってくる。最終的には、僭主、あるいはそのまた子ども辺りの時代なんかになると、単なる人の好き嫌いで、自分にちょっとでも嫌いなやつはみんな殺すとか、追い出すみたいな、大体、そういうことでやります。

古代ギリシャ人、大体、苦労した揚げ句に、思ったんでしょうね。一時的には、確かにこの人、僭主っていいと思うんだけど、結局、このような僭主って、長くなると、逆にひどい専制君主になって、われわれの権利を脅かす。だとしたら、こういった連中を絶対に出さないように、こういう有力者、仮に有能で人気者であっても、しかしそいつに独裁権を与えてはいけない、そのための仕組みを2重、3重、4重、5重に付けよう。でも、そうすると、逆にろくな指導者は育たなくなってくるので、それはうまくないっていう議論がまた出てくるんで、結構、ぐるぐる回るんです。だからプラトンみたいな人が出てくるわけでした。

プラトンの時代にも、当然、やっぱりこの僭主政治のいろんな危機があつて。僭主でもいいんじゃない？っていう雰囲気の時論があつたんだと思うんですよ。だから、ギリシャ人も迷い続けるんですけども、でもやっぱり、それでもわれわれは、普通の人々が政治に参加して、物事を決めるべき体制が良いのだ。なぜならば、われわれが戦ってこの国を支えて

いる以上、この国のために命を出して戦っているわれわれの発言権は認められてしかるべきである。そういう連中が話し合っただけで決めるほうが、長期的にはやっぱりいいんだっていう信念が定着した。それが僭主への誘惑を打ち破ったんだと言いたいですけど、ややこれは精神主義的な解釈でしょうか。もうちょっと物質主義的な解釈というものいろいろあると思うんですけども。決してだから一直線にいったんじゃないで、迷走に迷走を重ねたからこそ、それに歯止めをかける制度が念入りに作られたというのが、取りあえず解になります。

藤山: ありがとうございます。いろんな後々の議論にもつながってくるのかもしれないようなものも含まれていると思うんですね。その民主主義の良さと、いわゆるそれは初めから脆弱になるって言うこととっていうのは、ずっと先生がおっしゃるように、繰り返しているわけですから。だからギリシャの中でも、やっぱりそういう繰り返しがあったんだということだと思います。

他にいかがですか。城戸崎さん。

城戸崎: キヤノンの城戸崎です。貴重なお話ありがとうございます。課題図書と今回のいろんな話を聞かせてもらって、トクヴィルに関してちょっと興味をすごく持ったんですけど。アメリカのデモクラシーってということで、そのタイミングくらいで、初めてデモクラシーが肯定的な形になってきて、それは多くの人々が日常的に実践をするということが、アメリカの中で行われていたのかなと思っていて。それをアメリカがどういう考えとか、アメリカのそのときの背景とか考えたときに、そういうアメリカでデモクラシーがすごく発達というか、そういう形になっていった経緯とか、その辺がちょっと詳しく知りたいなと思ったんですが。よろしくお願ひします。

宇野: 先ほど申し上げましたが、フランス人なんですね、トクヴィルって。アメリカ人じゃないんですね。今、多分、アメリカ人はトクヴィルをアメリカ人だと思ってると思うんですけど、違いますよね。フランス人です。しかも彼は貴族でして、それも何ていうんでしょうか、新興貴族じゃなくて、ノルマン・コンクエストの時代にさかのぼれるような。彼、ノルマン人の貴族の子孫なんですけど、超名門、古い名門貴族の息子です。彼のお父さんも、彼のきょうだいも、みんな当時のブルボン朝支持の貴族の家族でして。

そういう保守的な貴族の家に生まれたトクヴィルが、わずか 9 カ月ほどアメリカに行っただけで、1830 年です。当時はもうアメリカ建国の時期のワシントンだとか、ジェファーソンだとか、ああいう輝かしい指導者が全ていなくなって、先ほどもちょこっと言いましたが、ジャクソンという大統領、これはトランプの原型といわれているような人でして、まあ、上品な人に嫌われるタイプです。

有名な。これ、うそなんですけれども、寓話がありまして。皆さん、OK って言いますよね。なんですか、OK って。何の略ですか、OK って。は？って感じですよ。これはジャク

ソンが、癖で。いろいろ彼に来るわけですね、大統領、どうですか。はん、はん、はんって言って、オールコレクトっていう、これでもよろしいって付けて。オールコレクトの略で。だったら、ACって書くべきですよ。彼は教養がなかったんで、OKと書きちゃった。それ以来、OKという言葉がはやったっていう、これは都市伝説のようでして。実ほうそだってことらしいんですけども。それぐらい、この人は教養がないっていわれまして。

南部の農民の本当にたたき上げでして、それこそ、対ネイティブアメリカンなんかの戦争で名を上げた人で、ネイティブアメリカンの虐殺とか、もうひどいことの限りをやってる人です。が、中西部の人の間では、もう爆発的に人気があった。それまでの大統領がみんな、もうワシントンにしても、さっき言ったジェファソンにしても、大体、みんな南部の貴族というか、大地主の人に対して、ジャクソンは全くそういう人じゃない。学校教育も受けていない。もうやっぱり人気が出たんですね。

ですから、トクヴィルはこの人を見たわけでした。普通に考えたら、貴族の権化のようなトクヴィル家から来たトクヴィルさんが、アメリカに行ってジャクソンのような教養もへったくれもないような人を見たら、ああ、やっぱり民主主義は良くなかったって言いそうな気がしますよね。だから、言った、俺は。民主主義は良くないんだっていう。アメリカの民主主義はばかだったとかっていうタイトルの本書いたら、きっとフランスって、当時、売れたと思います。しかし、そうしたら、きっと彼は思想家としては残ってなかったでしょう。

ここに逆説があります。なぜ、トクヴィルは全く逆のことを書いてしまったのかっていうと、彼はむしろ民主主義って、先ほどおっしゃったように、当時はいい言葉では必ずしもなかったし。多分、トクヴィルくらいなんですよ、民主主義っていう言葉をいい意味で使うようになったのは。

トクヴィルは実は迷いながら使っています。民主主義っていいものなのかな、悪いものなのかなって、すごく迷って書いてます。というのは、彼は貴族の家で、しかもフランス革命でひどい目に遭った家です。彼は、ある種、人生のingクライシスに陥ります。彼は頭では書齋でルソーを読んで、そうだねって言って、もうこれからは一部の王様とか貴族が牛耳る時代は終わったねって、頭では理解するんです。でも、彼の貴族の人の信条とか家族たちが、もうフランス革命なんて最悪、民主主義なんて絶対無理って言われて、どっちかなって。民主主義って、いいような気もするけど、やっぱり現実的には無理かなと思いつつ、ためしにアメリカ行ってみようって、アメリカ行ったんですね。しかも、そうやって最初に見たジャクソンとかみみたいな人いるから、やっぱり駄目かなと思ってたんですが。

彼は最初まずニューヨークに行ったんです。彼、面白いですよ。ブロードウェイも行ってらるんですけど、ブロードウェイって、今みみたいな劇場があるブロードウェイじゃなくて、当時は本当に馬道のブロードウェイ。文字通りですね。馬糞だらけなんて書いてますからね。やたら広い通りで馬糞だらけだった。

しかしああいう所で、いろんな商人たちと会ったんですね。ニューヨークの商人たちと。彼らを見ていると、彼らは確かに利己的だし、金もうけ熱心なんだけど、ある種、潔いところ

ろがあって、金もうけのためには、いくらでも人を出し抜いていいとか言わないし、やっぱり商業には商業のルールがあるし、結構、勤勉な人が多い。ちゃんとお金ももうけて、金銭を貯蓄して、財をなそうっていう発想があって。お金持ちになったから、やった一つて言って散財するようなタイプはいなくて、しばしばその生活スタイルは堅実である。

これ見て、そうか、金もうけが悪いわけでもないし、いわゆる金もうけに従事するような普通の人々が、それなりに勤勉な生活を送ってるならば、まあ、悪くもないかと。だからもう王様や貴族はいないけれど、こういう中産階級の人たちが、それなりに健全な社会って、ありかなっていう。ちょっとここでイメージ変わるんです。中産階級がしっかりしている社会はいいんじゃないの？っていう。

さらに彼はボストンのほうに行っています。ボストンに行ったところで、彼はちょっと面白い体験をしまして。タウンシップっていうんですけれども、ボストンとか東海岸のニューイングランドと呼ばれる地域では、自治体で自治を行う伝統があったんです。そこで彼は思ったんですね。地元のおじちゃん、おばちゃんたちとしゃべっていると、名もない田舎のおじちゃん、おばちゃんが、意外としっかりしたことを言うっていう。もちろん別にそんなすごいことを言うわけじゃないけど、それなりに政治について物を考えてるし、意外と堅実ないことを言う。なんでだろう。

アメリカの、それこそ国会なんかを見ていると、ジャクソンにせよ、政治家にせよ、ろくなのはいないんだけど、アメリカでは田舎に行って、田舎のおじちゃん、おばちゃんとしゃべっていると、意外と堅実で、意外と自分たちの地域のこと、よく考えてる。あれ？って。

なんでかなと思ったら、アメリカは中央権力が弱い。中央政府の力なんか、当時はもうしゃれにならないくらい弱かったですし、州政府の力すら弱い。ということは、新しい町は、ほとんどその人、市民たちが自分たちで物事を決めないとやっていけない。やれ、道路が必要だ。今だったら、われわれは国交省に訴え掛けて、道路造ってくれと言いますけど、そんなのはない。病院が欲しいといったって、厚生労働省に掛け合うわけにもいかない。学校だからって、文部科学省があるわけでもない。学校が欲しけりゃ、みんなで金を出し合って学校を建てるしかないし、みんなでお金を出し合って道路を整備するしかないし、みんなで必要、お金があると、橋を造ったり、病院を造ってる。そういうときに、みんなで物事を議論して決定してる。これがいいんじゃないか、と。

自分たちのことを自分たちの問題として、ちゃんと考えて、自腹切って、政治を行ってる。これこそがアメリカの民主主義のいい点ではないかということで、彼は帰ってきたときに、『アメリカの民主政治』っていう本を書いたんです。悩んだんです、初めは。

アメリカのリパブリックとかって、初め書こうかと思ったんですけど、リパブリックじゃ弱い。デモクラシーという、毒にも薬にもなる、でも多分、人類の歴史は必ずデモクラシーに向かうだろう。だとしたら、ろくでもない悪いデモクラシーよりは、少しでもより良いデモクラシーのほうがよいだろう。われわれの使命は、デモクラシーはもう必然だと。あとはいいデモクラシーか、悪いデモクラシーの違いしかないのだから、だったらデモクラシーを

いいものにするべく、頑張るほうがいいんじゃないの？と、彼が自分のお父さんやきょうだいを説得して書いたのが、『アメリカのデモクラシー』という本でして。実に味わい深い本でして、半分くらいアメリカのデモクラシーの悪口を言っていますね。

アメリカ人、喜んで、この本はアメリカのデモクラシーが分かる、アメリカのデモクラシーの最高の本だとか言って。あれ、絶対、読んでないですよ。読んだら、半分以上、アメリカ人はばかだ、お調子者だとか、何も考えていないとか、ろくなこと書いていませんから。大抵のアメリカ人があれを読んだら、みんな怒りだすはずなんですけど、みんな読んでないから、みんなアメリカのデモクラシーがいいんだって言うんですよ。

ただ、半分、アメリカのデモクラシーに対して疑念があるんですよ。でも最後の結論は、プラマイでいくと、プラスのほうがやや上回るかなっていう。だったら、それに賭けるべきじゃない？っていうのが、トクヴィルの結論だと思います。

城戸崎：ありがとうございます。

藤山：今の城戸崎さんの質問で、先生が最初に、本編の中で、自治と結社とおっしゃってますね。だから、自治と結社が分断された、民主主義によって分断された個人が、民主主義を勉強するのに役に立っているという、そういうイメージですよ。

城戸崎：そうですね。なるほど。分かりました。ありがとうございます。

藤山：はい、梅原さん。

梅原：JSTの梅原と申します。よろしくお願ひします。実はちょっとキソザキさんに影響されているところもあるんですけど、今の自治と結社で、アメリカの場合って、結構、そういう文化的な背景もあってというところで、確か、本にも書かれてたかと思うんですけども、私、実は民主主義って訳語を、前からずっと気にしてまして。デモクラシー。デモが民なのは、なんかすごくしっくり来るんですけど、クラシーっていうのが、主っていうふうになっているのが、結構、違和感をずっと持っていて。かなりなんか権力的なもの結び付いたクラシーな気がしてたんです。テクノクラシー、アリストクラシーもあるし。

その中で、一つ手本として、日本がこれを取り込んだときのものかなと思っているんですけど。これっていうのは、つまり、民主主義っていうのはやっぱりアイデアみたいなもので、何かしら、そういう文化的な解釈がいろんな国ごとにあつた中で、求めていってっていうお話と捉えていいのかなどうか。

きょう、伺った感じで、まさにアメリカの形って、なんか学会とかでよく見るんですよ。アメリカの学会って、すごくいろんな、物申すことが多いのに比べて、日本の学会って、多分、ほとんど物を言わないし。それは体制的な問題なのかもよく分からないんですけども、

何となくそういう、ここの本にも書かれてたように、ヨーロッパであり、アメリカでありっというの。日本で民主主義っていうのは、最初、教育のことも言及されたんですけど、これ、どう捉えればいいかなというのが。すいません。これだけお話を伺っても、まだちょっと疑問に思っているところっていうところで。ちょっとうまく質問の形にしようと思うと、もっと自由の普遍的な理念かって立てられた問いに関して、私の印象はちょっとそういう、割と文脈なのかなっていう印象です。

宇野：ありがとうございます。いろんな問題、内容を含む問いだと思うんですけど、まず最初、翻訳の問題はありますよね。デモクラシーを民主主義と訳していいのかどうかっていうのは、一つ大きな問いだと思います。

まず最大によろしくないのは、主義ではないですよ。デーモスのクラトス。クラトスは力とか支配って意味ですから。民衆の力、民衆の支配というのが、もともとの意味ですから。これをデモクラティズムなら、民主主義でいいと思いますけど、民主主義っていうふうに、主義って訳しちゃったっていう点で、まず最初に決定的に間違いましたよね。これは日本人が訳したわけですから。今、これ、中国人も同じ言葉使ってるわけですから、ほとんど東アジアに対して責任があるのは日本人なのかな、と。

でも日本人にとってみると、やっぱりなんか明治になって、よそから入ってきた社会主義とか、何とか主義とかっていう怪しげな主義の一つだなと思ったんでしょね。ですから、主義だっって入れちゃったんですけど。本当の意味からいうと、そういう言葉じゃないです。主義じゃなくて、もっと、何ていうか、具体的な人々の実践とか、生活スタイルとか、物の決め方を指すものを、本来、デモクラシーっていったんだと思います。

ですから、ジョン・レノンのほうが近いかな。power to the peopleっていうやつ。power to the peopleってありますね。あれ、もちろんデモクラシーって意味でして。あれ、まあ、ベトナム戦争の影響を背景にしたわけですから、ごく名もない普通の人々が声を上げようよ。そういう彼らに発言権を与えようよっていうニュアンスで、ジョン・レノンはその歌を歌ったわけですけども。民主主義と訳すよりは、デモクラシーって、多分そっちのイメージに近い。

つまり古代ギリシャの最初の時期は、民会に集まれるのは、ごく有力者だけだった。主に貴族とか、名家の人ばかりでした。そこに、俺だっって物を言わせてくれよと。イセゴリアという言葉があるんですけど、これは平等の発言権という意味でして、しばしばこのイセゴリアとデモクラシーは同義語とされました。つまり、ごく名もない、吹けば飛ぶような零細な人々が、それでもその場で、俺にだっって言わせてくれよっていう。俺の言うことだっって聞いてくれよっていう。って、聞かせた。力づくで聞かせた。そのために作り出された実践、制度、その総体のことをデモクラシーと呼んだ。それは古代ギリシャの他の人たちから見たら、すげえなと思って、ごく普通の人々がしゃべってるよっていう。

先ほど、アメリカの学会ではって話しましたが、学会でみんなしゃべってるのは、まだ

いいんですけど、大学なんかでも、みんなよくしゃべりますよね。本当によくみんなしゃべるけど。一見すると、われわれなんか、一見、圧倒されちゃって、アメリカ人はすごいな、こんなにみんな英語しゃべる、すごいなんて、まあ、それは当たり前なんだけど。内容を聞いてると、ろくでもないのがいますよね。あんた、もうちょっと勉強してから、物言えよっていう人でも、平気で言う。でも、一応、ちゃんと答えてますよね。多分、あれがでも、デモクラシーのイメージじゃないでしょうか。

おまえ、もうちょっと勉強してから出てこいよとか、おまえ、もうちょっと、その地位としかるべき年齢になって、おまえが認められるような奴になってから物を言え。おまえのように何も勉強してない、ペーパーのやつが、こんな人前でいきなりべらべらしゃべるんじゃない、ばかっというのは駄目だと。どんな人であっても、どんなに愚かなことであっても、俺の言うことも聞いてくれよ、言わせてくれよ。だって、俺だって、この国に貢献してるんだから。そうだな。しょうがないな。じゃあ、いいよ。おまえにも認めよう、言わせよう。それが多分、民主主義というよりは、デモクラシーということで、この力がだんだん拡大した時代と、やっぱりそんなこといっても収縮した時代と、これを繰り返してきたんだと思うんですよ。

でもやっぱり一番、民主政治、デモクラシーの大切な部分っていうのは、やっぱり多くの人に政治に参加させる。いいか悪いか分からんけど、参加させる。その心は、みんなで決めたら、いい結論が出るとは限らないけど、少なくとも排除された人は、政治に対して、俺が決めたんじゃないから。強制されてるから、知らねえよって言うけど、自分で一応、参加したなら、自分だってやっぱりそれを守らなきゃいけないよねっていう、ある種の公共精神が出てくるだろう。やっぱり参加した以上は、その決定に自分も従うべきだろう。自分で納得して、ルソーをものすごく戯画化しちゃいましたけど、やっぱり一応、参加して、自分も納得して決定をしたんだから、だから従おうっていう、この一番素朴だけど、でも強い倫理的なメッセージ。これを含む形で、発展してきたのがデモクラシーなんじゃないかな。

梅原：最初におっしゃってた大前提として、政治があるっていうのは、やっぱり何かを決めるためのやり方としての民主デモクラシー？

宇野：そうです。政治っていうものがあるのを前提にして、そこに多くの人が、俺も入れろということで、発展しているのが、デモクラシーだと思います。

藤山：他には何か。それじゃあ、吉田さん。

吉田：東芝の吉田です。貴重なお話ありがとうございました。この最後にのところで、民主主義は人類の普遍的理念かっていうふうな問いがあったんですけど、私の感覚からすると、一日のうちのほとんどの時間が、企業の中で生活をしていまして、企業の中には、基本的に

は民主主義はないっていうふうに思ってるんですね。やっぱりみんな決めて、何か物事を決めて進んでいくっていうふうな考え方はなくて、基本的には意志決定者がいて、それに従って行動してるっていうふうなのを、一日の大半をそうやって過ごしているのです。じゃあ、それが普遍的ですかと言われると、なんかそうじゃないような気もするし、じゃあ、そうじゃない生活がほとんどなのに、自分は不幸ですかと言われると、不幸でもないんじゃないかと。やっぱりちゃんと生活基盤が与えられているし、別に自分の不満足を解消するような仕組みもある。そういう状況でいるので、そんなに悪いシステムじゃないんじゃないかなというのが、一つ、会社の中の実態としては、感覚としてはあります。

逆に、会社っていう形態の中で、民主主義的な仕組みで成功しているものっていうのは、あるんだろうかっていうのも、ちょっと気になっていまして。なかなか、ぱっとは思いつかないなというふうに思ってます。それはなぜなんだろうというのも、少し疑問としては湧いてまして、その辺について、何か示唆というか、何か考えるヒントみたいなものがいただけると、ありがたいなというふうに思いました。

宇野：ありがとうございます。とても重要な問いでして、これもいろいろ議論があります。冒頭で申し上げましたように、企業のトップの方たちとお話ししていると、やっぱり企業というのは、トップが意志決定をして、判断をする。で、それに従ってやるんであって、民主的に議論をするという世界はないんだ。その代わり、トップは責任をちゃんと取るんだ。それがうまくいくかどうかであって、それは最終的に市場が判断することである。従って、企業モデルにおいては、民主主義というのは入る余地はないのであって、民主主義というのは、どこの話であるかというご指摘も、極めてもっともな部分があるかと思います。

これに対して、幾つかの答え方があるかと思います。一番直接なのは、いや、やっぱり企業にも民主主義はあるべきだという発想が一番、ある種、分かりやすい答えです。正しいかどうかは知りません。実際、ある時期までの民主主義は、特に20世紀後半の民主主義論の多くは、いわゆる企業内民主主義論が多かったです。つまり、企業っていうのが、今、現代社会において一番大きい組織で、一番力を持っているんだから、もしそこが反民主的なものであったら、国全体としての民主主義がうまくいくはずがない。従って一国の民主主義がちゃんと機能するためには、企業内民主主義を発展させなければいけないという議論が、大真面目でありました。今、聞かなくなりましたね。しかし1960年代、70年代くらいまでは、非常によくあったと思います。

それは社会主義の中においても、ソ連とか、共産党指導型じゃなくて、それこそ次期、ユーゴスラビアなんか、自主管理的社会主義なんていわれるときに、社会主義においても、共産党独裁ではなくて、ある程度、経営体の中に労働者が参加して、意志決定をする仕組みを分権的につくることによって、社会主義をより良いものにするっていう動きが、いろいろありました。

ああいう自主管理型社会主義が社会主義圏であり、アメリカにおいて企業内民主主義論

があって、これがどうも、ある種、セットのように働いて。やっぱり企業のような経営体、経済的な組織の中においても、何らかの民主主義は実現するべきであるという論理があった。

しかし、今、それが全然はやらなくなってしまったというのは、やっぱりうまくいかなかったってことですよね。その中に、一時期は労働組合がもっと力を持つべきだみたいな答えを出したり、いろいろ議論はあったと思いますが、結局のところ、企業内民主主義っていうの、うまく実現するような仕組みができず、やっぱり企業というのは、トップからの決定で、ある種の機能的な上下関係、ヒエラルキー組織であって、民主主義っていうのはなかなか通らないよっていうのが、まあ、ある種の有力な議論であろうかと思います。

しかし、私はこの答えにまだ納得しません。まだ第2弾がありまして、とはいえ、じゃあ、民主主義の社会において企業というのは、全然違う異質なものだっていえるかどうか。

例えば、もし企業内で非常にひどい目に遭った場合、もちろん企業内で文句を言うかもしれませんが。場合によっては、労働組合の力を借りるかもしれません。しかし、それでもらちの明かない場合だって多いですよ。非常に不当な扱いを受けた場合。その場合はどうするかっていうと、基本的にはやはり企業の外で、労働審判を受けるなり、何らかの過程で裁判をするなり、こういう制度があるからこそ。ある意味で、労働基準法があって、これを国が外から強制しているからこそ、企業の中で、労働者の権利が守られているわけですから。

決して企業というのは、単独で、非民主主義でいいというわけではなくて、やっぱり民主的的社会の中にあるからこそ企業であって、企業内における労働者の権利が保障されるわけであって、決して民主主義と無縁ではない。ただ、やっぱり民主主義的な意志決定、その下における権利の保護みたいな仕組みっていうのは、企業の外にあって、企業の中は、あくまで、それを前提にした経営効率を極める組織だっていう理屈はある。

だから、企業は民主主義と無縁ではないが、あくまで外にあって、企業を下支えしているのが民主主義だ、あるいは自由民主主義だっていうくらいの議論も、あるいは可能かもしれません。

しかし、私はまだ第3弾がありまして。本当に企業内に民主主義ないですか。私、日本の企業のいい点というのは、決して必ずしもトップダウンではなくて、ある意味でいうと、それぞれの職場の人たちが、かなり実はインフォーマルな形を含め、自主裁量権を持ち、ボトムアップ型の組織であったのが、日本の企業の黄金時代だったんじゃないですか。あれは、民主主義とはいわなかったと思いますが、それこそ、社長が全て決めるのではなくて、それぞれの部署にいる、それぞれの現場で働く人たちの声が生きたからこそ、日本の企業というのは、一時期、非常に世界に冠たる活躍をしたわけで、あれこそ企業内民主主義であって。

つまり、そういう構成員たちの声をちゃんと聞いて、その人たちを実現させる。彼らは単に従えていうだけじゃなくて、発言し、企業の在り方に対して問題提起し、自分もこの企業を支えているんだっていう誇りを持っているからこそ、献身もするし、アイデアも出すのが、日本の企業の、ある種の理想形だとすると、私は結構、日本の企業というのは、民主主

義論理を持ってきたし。逆に今日、そういったものが薄くなってるのが、日本の企業の力を弱めてるんじゃないかという仮説すら、可能ではないかと思っております。

藤山：ちょっと今のお話。私は41年間、企業の、商社なんですけど、企業参謀みたいな仕事で、どういうふうに意志決定を会社の中を持っていくかっていうことを、裏方と仕組みづくりみたいなことをやったんです。今の先生のおっしゃった部分は、非常に身につまされるわけで。これが、決定のところを民主的にはできないんですけど、少なくともアイデアを出す、アイデア出しのところっていうのは、民主的な議論ができてないと、いいアイデアが出てこないですね。だからオルタナティブをどう出させるかというのは、発言の自由とか、均等というものを保障しないと、なかなか出てこない。最初から黙っちゃうと。そのところは、おっしゃったように、かなりうまい信頼関係ができた時代があって、そのときの日本企業は競争力が強かった時代であったなど、同じ印象を私は持って。それをちょっと付け加えておきますね。非常に今日としては、いいあれだと思います。

そうしたら、先に星野さん。

星野：JXTG エネルギーの星野と申します。きょうはありがとうございます。いろいろお話を聞いていて、民主主義はどちらかということ、大人数になればなるほど、うまくいかなくなって、少数であればあるほど、うまく回るっていうような、何となく印象を持っていて。それがもし正しいとすると、なんで大人数になったら、うまくいかなくなってしまうのかっていうのは、いろんな考え方があるのかなと思うんですけど。

もう、そもそも議論ができないからっていうのも、当然、直接的に議論ができないからっていうのもあるでしょうし、自分の意見が、何ていうんですか、通るといえるか、自分の意見が、大人数になればなるほど薄まってしまっているところもあるでしょうし。それにあれして、責任感が逆になくなってしまうっていうところもあったりするし。

また多ければ多いほど、いわゆる、何ていうんですか、同じような人たちで議論をすれば議論もまとまりやすいから、みんなが納得するような感じになって、民主主義っぽく。本当に民主主義かっていうと、分かんないかもしれない、なるけれども、大人数になればなるほど、いろんな人がいて、多様性が増すからなのかなとか。そういったところを思ったりするんですけど、その辺りについて、ちょっとご意見をお伺いできればなというふうに思います。

宇野：重要な問いでして、最初にもう降参してしまいますと、私はあまりいい答えを持っておりません。おっしゃるとおりなのかもしれないという気が、どうしてもしてしまうからです。

と申しますのは、先ほどから申し上げているとおり、デモクラシーという言葉が古代ギリシャで生まれたときには、やっぱり大前提にあるのは、フェース・トゥ・フェースでお互い顔を合わせて議論するっていうのが、大前提だったわけです。その前提には、当時のポリス

ですから、最大、市民4万、5万くらいですから、全員を知っているということはないにしても、多くの人が顔くらいは知っている。一定程度の信頼関係がある。だからこそ、しゃべるし、しゃべれば聞いて分かってもらえるだろうという前提があるわけで。お互いの顔がある程度分かって、それなりに信頼関係があるのを前提に、発言をする。発言をしたからそこには、責任を取る。こういう発想が、デモクラシーの根幹にあると思います。だから、さっき言ったイセゴリアっていう平等な発言権っていうのは、非常にデモクラシーとほぼ同義語として使われたわけでありませう。

それに比べますと、現代のまさにマスデモクラシーにおいては、多くの人々は、実際に発言なんかすることありません。選挙を通じてか、世論調査を通じてか分かりませんが、マスとして人々を計られて、人々の思いや思考はここにあるだろうというのを、何らかの形で探り当てて、それを実現するのが民主主義であるという建前を取っておりますから、これをやる限りにおいては、多くの人は一生涯に一回も政治について発言することはない。あるいは聞いてもらえない。

このようなことを前提に、デモクラシーを動かしていかなければいけないわけですが、そもそもその問いとして、これってデモクラシーかっていう。冒頭申し上げたように、代議制民主主義って、本当に。選挙ってデモクラシーじゃないというのは、古代ギリシャ人の発想で。つまり、選挙っていうのは、人を選んで、そいつに任せちゃって、後は知らないよっていうことになっちゃうから。やっぱりみんながちゃんと関心を持ってもらって、発言してもらって何ぼのものだから。誰かに任せたら、もうその瞬間、デモクラシーじゃないよというのが、基礎理解ですから。

本来の古代ギリシャの定義にさかのぼれば、現代のデモクラシーは、そもそもデモクラシーじゃない。やっぱりマスでは不可能であると言っちゃいそうですね。でも言ったら、身もふたもないなということで、困ったということで、いろいろ考えてるわけです。

例えば、こういうフェデラリストでしたかね。一番最後に申し上げた同派の証人、多元主義なんて、面白い発想でしたね。これは何を言ったかっていうと、派閥ってあるよね。派閥って良くないよねって、世の中、言いますよね。でも、このフェデラリストたちは、逆転の発想をしたんです。何かというと、狭い集団だと派閥が致命的な力を持つけど、大きな社会になると、いろんな派閥があるから、オープンなところで派閥を競争させれば、決して悪くはないっていう。

だから、先ほどの、大きくなったほうが参加者が大きくなって多様性が増すからいいっていう発想を、むしろ使おうっていう発想が、このフェデラリストでして。ですから、彼らは面白い。連邦制はいいよって。なんでっていうと、1州レベルでいうと、ある支配的な集団できちゃうかもしれない。ところが全部の州、当時だったら13州、今だったら50州全部で、一つのグループが独占で力を持つことは、まずあり得ない。多様な集団が多様な派閥活動をしてると、まあ、適度に競争されて、それなりにまっとうなところに結論落ち着くだろう。従って、もう民主主義っていうのは、みんな顔合わせることは無理だけど、それぞ

れ顔を合わせて物を決めてるいろんな集団があって、その集団同士が競い合って、競争し合えば、いいだろう。

つまり、ちゃんと顔を合わせて議論して、考えて自分たちの利益を考えてる集団が複数あって、その複数の集団が競争するような仕組みをつくれれば、それを民主主義と呼んでもいいんじゃないですかというのが、フェデラリストの結論です。そうかなって。これこそが、なんか今のあしきロビイング政治、利益集団政治をつくったような気がして、あんまりこの発想がいいとは思えない気もするんですが。

もうだから、フェース・トゥ・フェースの小集団で大きな社会は無理だから、だったら小集団をたくさんつくって、それを競争させることによって、社会全体として、何とか民主主義だといえるような仕組みをつくらうというのが、一つの発想ですね。

でも、利益集団が競い合ってて民主主義だ、とはあまり思えないなという方には、今、住民民主主義みたいに投票するだけじゃ駄目で、やっぱりいろいろみんなが、市民の皆さんが議論する場を意図的に作りましょう。

面白いと思うのは、いろんな事例で研究してるんですけど、いきなり人集めて、いっせいのせで投票すると、ある結論が出るとする。終わった後に、その人たちを小グループに分けて、いろんな議論をし、いろんな情報を与えて考えさせて、議論終わった後にもう一回投票させると、随分違う結論になるっていう。これを実証的に研究しているのが、今の住民民主主義です。

やっぱりどこか民主主義って、みんなでいっせいのせで大量に決めると、すごく無責任な、その場の空気に流された変な結論になっちゃうから、どこか、このようなマスデモクラシーでも、部分部分に、仮に全員ではないにしても、市民から無作為に抽出すればいいから、人々に集まってもらって、どこかでちゃんと議論するっていう場を幾つかつくっていくと、多少はましかなっていう、この辺も今、議論はあります。

で、そうは思っていますけど、いいことはないですね。マスレベルでデモクラシー、本当に可能ですかと言われると、いや、あんまり自信ないですっていう、どうもそういう結論になってしまいます。

藤山：今の考え、代議制と、それから人数の問題という、アイテムに直接投票する国民投票で、国民投票の弊害みたいなことも、今、論議されてますけど。

一般的に言って、先生は、国民、今の代議員制があった中での国民投票っていう、ブレグジットもあったし、ギリシャの国民投票もあったんですけど。日本もやりたいって言うてる人もいるみたいですけど。その辺はどんなふうに。

宇野：皆さま、教科書的には、イギリスというのは議会政治の国であって、議会にできないことは男を女にすることだとかって、昔からありましたね。今は別にできるだろうと思えますけれど。それくらい議会政治の国でして、何でもできるという国でした。逆にいうと、議

会で全てを決めるというのを誇りにしていた国ですから、そのイギリスで国民投票をやるってこと自身が、やっぱり大きな、ある意味でいうと、チャレンジでしたね。それが、今のところ、いいほうに機能しているかという、悪いほうに機能しているのではないかっていう。

つまり、議会で議論して議論して、そこで膠着して、うまく物が決まらなくなったときに、じゃあ、みんなでいっせいのせで日時を決めて、一斉に投票して。それこそ、準備もへったくれもなく、わーっとみんなで、いっせいのせで決めちゃうと、その瞬間風速で、とんでもない結論が覆ってしまうんじゃないかということで。今、イギリスも、やっぱり国民投票なんていうものに手をつけてしまったのは、パンドラの箱を開けてしまったんじゃないか、やっぱりあれは良くなかったんじゃないかっていう議論が、よくありますよね。

ただし、国民投票が全部悪いかっていわれると、いや、国民投票こそが真のデモクラシーだから、それが当然、成り立つあるわけですよ。普通の人々は、人を選んだところで、さっきのシュンペーターじゃないですけど、議員を選んだらそれで終わり、それ以上には政治的決定に影響を与えられないっていうのは、やっぱり民主主義の発想からすると、なんか違うと。みんなが自分たちで物事を決めたいっていうのが民主主義だとすると、それをダイレクトに国民が政策を決める国民投票は、なんで悪いかっていわれると、いいじゃん。

となると、私は、でも、やっぱり本当に議会すらちゃんと決められないような 이슈を、いっせいのせで、ある瞬間風速で決めるのは危険だとすると、じゃあ、どういうタイミングで、どういうテーマだったら、国民投票を使っていいかっていうのは。選択的に考えれば、私は、国民投票っていうのは、原理的に駄目だとは思いません。ただ、それをしっかり考えないで、政治が膠着したときに、もうこうなったら、もうなんかを投げて、コインの表か裏か、どっちでもいいけど、誰か決めてくれてって感じで、でたらめでもいいから、とにかくみんなで国民投票で決着つけようぜっていう発想は、すっごいリスクキーだと思います。だから、難しいですね。

藤山：国民投票が有効なときもあるんだろうけど、その有効な条件っていうのは、かなり難しい。

宇野：かなり限られてくるんじゃないでしょうか。

藤山：すいません。お待たせしました、齋藤さん。

齋藤：日産自動車の齋藤といいます。僕も正直に言うと、なかなか社会だとか国に対して、じゃあ、自分自身がコミットメントを持って、民主主義とは何だかを、日々ちゃんと考えられているかっていうと、あんまり自信がないです。だけど、さっきヨシダさんもあれだったけど、自分が今、属している組織の中だったりとか、企業の中で、じゃあ、どういうことが

起こっているんだろうっていうのを置き換えて、自分で考えてみました。

日産自動車で、先ほど、藤山さんもおっしゃったように、もしくは先生もおっしゃったように、いろんなところで議論を尽くしていくというのは、当然、起こっていくと思っています。例えば、グローバルエンタープライズですか、いろんなリージョンの地域の代表の利益で、利益代表のけんけんがくがくとしたやりとりもあるし、機能として、僕は開発部門にいますけども、何が正しいかということ、単純にトップに丸投げして決めるわけではないから、その合意形成をしていったりとか、いろんな分析をして、議論をし尽くしていくところっていうのは、通じるところなのかな。

しかもフランスの同僚たちとの間では、本当にその背景にある、なんか歴史的ないろんなバックグラウンドだとか含めて、分からないもの同士を俎上に上げて、本当に議論を尽くすようなことをします。それで、ワンボイスをなるべく形成して。もちろん最終的に合わなければ、これはこう、これはこういう意見だけど、どう決めましょうかと、もちろんデジテーションをオーソリティーに上げて、もちろん企業の中で意志決定をする。これ、いいことだとは思ってます。

なんだけど、効率という観点で見ると、非常にエネルギーがかかるというのも事実です。やっぱりこれだけいろんな世の中が速く動いている中で、もういいから決めてほしいって、危険な、多少、なんですか、思考停止に近いような危険な領域があって、もういいよ、決めてくれよって言いたくもなる。

僕も2003年から3年間ほど中国行ったことあるんですけど、中国ってどうしてたかなと、ふと思うと、あそこはやっぱりエリートの共産党の中で、各企業の中に当然エリートという人は共産党に属して、しかも青年部からいろんなとんどん選抜されていくんですよ。で、彼らは小集団活動みたいなのを通じて、ちゃんと参画をする。だけど、ボトムアップとトップダウンがうまくできてるんだろうかと想像するに、会社の中でも、日本が元気だった頃はQC作業とか小集団活動とうまく結び付くところもあったんだけど、これ、また戻ってくるんですけど、やっぱり効率の観点で、時間がどうしてもかかってくるから、だんだん今の世の中、このスピードに合わなくなって、現場でうまくそこを説いていくっていうのは、なかなか難しい実態を持っています。

問いの中で、そういった、それを民主主義と見立てると、それを可能にする条件は何なんだろうと思いつながら、一人一人が。まあ、企業なんで、完全な一般大衆と一緒にいると、そうではなくて、あるレベルを持ってきちんと考えを持って、バックグラウンドを持って議論に参加しているのは事実かもしれないけれども、この参加と責任と、一番最後に書かれているのは、非常にしみじみと刺さって。みんなが本当にそこに責任を持っていて、その一緒に決めようとしてできているか。

でも、そのモチベーションとか、インセンティブは何かというと、実現したい将来とか未来を、ちゃんと社会と、企業であれば企業の中で、もしくは組織の中で共有できて、そこに自分が本当にコミットして貢献しようと思えば、ある意味、変な政治的な駆け引きを越

えて、これが加速できるんじゃないか。でも、なかなかそれって、現実の中では難しいなと思っと思っていますということ。

これが、冒頭で、中国がキーになるのかなという話もありましたけど、先生からご覧になって、そこはどのようにご覧になっているかというのを、ぜひ伺ってみたいと思います。

宇野：幾つも重要な問題提起がありました。まず最初に一言だけ申し上げると、私は長年、ホンダの車を使ってきたんですけども、このたび、ついに日産の車を買ってしまいました。3月1日納車です。ついにリーフです。電気自動車に乗り換えます。

齋藤：ありがとうございます。

宇野：どうでもいいことに恐縮であります。いや、日産というのはどうでもよくないけど。

まず最初、効率の問題ですね。民主的な決定というのは、常に時間がかかって非効率であるというのは、これはやはり否み難い事実ではないでしょうか。だから先ほど申し上げましたように、短期的に考えると、先ほどの僭主じゃないですけど、ギリシャでも危機になったり、なんか非常に急いで物事を決めなきゃいけない、正しいか間違ってるか、ともかくちゃんと決めなきゃいけないというときは、やっぱりこういう人は出てきちゃうんですよね。

民主主義の良さが出るのは、やっぱり長期的な、ある意味で構成員のコミットメント意識や責任感を養うっていう意味で、長期的にはいいんですが、短期的には必ずしも効率的な決定方法ではないということは、これは否めないですね。ですから、短期的な意志決定と、そういう長期的な民主主義をどう組み合わせるかというのは、いろいろ考える余地はあると思います。

先ほどちょっとお話ししたんですけど、古代ギリシャじゃなくて、ローマなんかは随分面白いなと思うんですけど。独裁者って、悪い言葉でわれわれは使いますが、ディクタートルというのは、ローマは制度として作りました。独裁官という制度を作りました。これはなんでかということ、内戦になりそうだとか、非常な経済的危機だとか、非常に難しくなったときには、独裁官という制度を作らして、超法規的措置を含めて、何をやっても良いという独裁官を任期限定でつくるという、そういう制度がありました。

つまり、そういう時期に、がたがた議論していると時間が遅れてしまうので、思い切って、独裁権限で何もかも。ただし、時間を限定する。あと、責任を追及する。任期が終わった後に、その5年間なり10年間の間にやった独裁官の仕事を全部チェックし直して、ひどいことをやったってやつは、ひどい厳罰を与えるっていう時限的独裁官という制度も、これは古代ギリシャ、ローマ以来、ずっとある制度でして。今日なお、短期的に物事を決めるときに、一定の人に集中する、しかしその後その責任を追及するという仕組みは、考える余地がいろいろあると思います。

しかし、どうでしょう。中国の場合、中国というのは、もちろん今のところ、独裁体制と

はいわれますが、今、おっしゃったように、エリートのリクルートの仕組みはかなり複数です。今はもうだいぶ各地域の自治の、だんだん層を上げてくるという仕組みもありますけれども、そこも最初は青年団だとか、いろんな形で人がやって、かなり激しい競争をさせているわけであって。それを見ると、シュンペーター的にいえば、エリート間で競争があるわけで、それで取りあえずいいではないかという発想は、十分にあって。

かつ中国の場合は、地域ごとの多元性が極めて強いわけですから。われわれが思っているより、中国って一つの中国ではなくて、多様な中国の共同、集まりだと考えれば、かなり分権的な組織でもあるから、中国といっても、民主主義の面が全くないわけではなくて。そういうエリート間の競争と、地域間の多様性というものが、今後、中国の民主化というものに対して、長い目で見れば、影響を与えてくるという可能性はあり得ると思います。

しかし、それでもなおして、一番おっしゃられたように、やっぱり自分たちが何かに加わって、だからこそ、そこに責任感が生まれて、だからそれを良くしていこうっていう、あるいは小さな単位でなければいけない。そういう小さな単位でなければいけない民主主義みたいなものを、今の地域社会、あるいは企業の中で、どうやって実現していくかっていうと、これは、これからまだちょっとアイデアをいろいろ考えなきゃいけないですね。

藤山：ありがとうございました。まだ発言されてない方は菊田さん。

菊田：すいません。東北大学の菊田です。すいません、ちょっと古いほうに戻ってしまうんですが、実際、アメリカの独立、民主党と共和党の対立するっていう形もあるんですが、古代ギリシャの民主主義から、これ、先ほど先生からもお話もあった古代ローマの共和制に移っていったときに、僭主制から共和制に多分、選んだっていう形だと思うんですが、古代ローマのほうでは。その一番、民主主義から共和制に選んだというところの重要なところとか、民主主義の足りないものというところは、古代ローマとしては、どういうふうに考えていたのかなというのは、すいません、古いところに、ちょっと私、気になって考えておりました。

宇野：これは一つポイントは、ポリュビオスという古代の理論家がおります。この人が非常に面白い有名な循環政体論というのを展開しまして、これは古代共和制ローマがギリシャのデモクラシーと自分たちを区別する上で、一つのポイントとなりました。

どういうことかという、ポリュビオスはこう言います。1人の非常に優秀な独裁者の時代もあるだろう。ところが大体そういう連中も、一生ずっとしっかりしているとは限らなくて、ボケてくると、だんだんひどいことになったりする。さらにその息子の代になると、目も当てられなくなる。つまり1人の独裁者というのは、必ず劣化する。少数のエリートが、責任感を持って一生懸命頑張っている時代もあるだろう。しかし、そういう連中は、次第に、単に自分たちの利益を守るための利権を独占する寡占集団に、大体、墮落していっ

て、自分たちの利害を守るために、世の中の多数派を排除する、とんでもない少数エゴ集団となるだろう。民主制もそうだ。みんなで集まってちゃんと議論して、お互いに信頼感にみちみちて、良い国をつくるルートもあるだろうけれど、だんだんみんなやる気がなくなって、1人頼みになっていって、無責任になってくると、大体、みんなで決めるのはろくでもない結論を出す。

答え、どの政体も必ず堕落する。1人支配も、少数支配も、多数支配も、全部堕落する。だから、どの政治体制も必ずいいって言う答えはない。これはポリュビオスの答え。それだけだったら、当たり前過ぎて、あまり面白くない。いい解答があるとポリュビオスは言いました。どの政体も必ず悪くなるのであるならば、三つ組み合わせればいい。1人支配と、少数支配と、多数者支配のいい点のところだけを組み合わせよう。

つまり、1人支配のいい点は決断ができる。少数支配は優秀なエリートを育てて、その連中が1人の独裁者を選べるようにすること。民主的支配は世の中の多数の人々に政治的な発言の機会を与えて、当事者意識を持たせる。この三つを全部組み合わせると、一番いいだろう。

そのためにはどうしたらいいかという、ローマの共和制というのは、コンスルという執政官が1人もしくは2人必ずいました。元老院という非常に権威を持った少数エリート集団が、頑としていました。他方において民会があって、そこには一般の民衆が参加できました。

つまり、1人支配の執政官と、少数者支配の元老院と、多数者民主主義の民会、三つそろっているからこそ、ローマの共和制は腐敗を免れ、古代のギリシャの民主制はいくらいい時代といっても、たかだか200年。ところがローマの共和制は数百年続いた上に、後に帝政ローマになってからも、ある程度、その仕組みは残った。そう考えると、数百年、下手すると1000年近く持ったのが、ローマの仕組みのほうが持ったではないか。従って、正しいのはローマであるという教えが出来上がります。

これを真面目に学んだのがアメリカの独立者で、よし、それ、いこう。で、大統領、これは執政官が1人。で、上院のことを、よりによって、セネトというんですよね。すげえ名前付けたなと思いますよね。セナトってローマの元老院って意味です。だから、アメリカの上院ってというのは、アッパーハウスではありません。セネトです。元老院って意味です、あれは。つまり、あれはやっぱりエリートの集団なんですね。それから、民会に相当する下院をセットにする。ローマそっくり。何てよくできたんでしょう。

だから、もう明らかにアメリカの建国者たちは、デモクラシー—極支配は絶対にろくなことにならない。むしろ1人支配と少数者支配のいいところを組み合わせたローマモデルでいこう。結果的に今のアメリカの体制というのは、憲法が、今、続いている国の中で、一番古いです。そういう意味でいうと、アメリカの政治体制というのは、何だかんだ持ちが良くて。今だって、トランプがあれだけむちゃくちゃやっても、駄目なのは裁判権とかいろいろな権力を彼は抑制するところがあるからであって、やっぱりアメリカの仕組みはよくでき

ていると、いまだに言っている人がいます。

このローマ、アメリカ、うまくやった説、ちょっと眉唾ではあるんですけども、そういう考え方もあります。

藤山：ありがとうございました。一応、全員、ひととおりの話をしたと思いますけども、ちょっとここでトイレ休憩を入れて、残り 30 分弱。

特にグローバリズムの批判としての民主主義っていうのは、どこ行っちゃうんだろうとか、中国を見習ってくる国があふれてって、中国が肥大になることっていうのは、本当にあるんだろうとか、ちょっとそういう次元。あるいは民主主義って改良するポイントはどこにあるんだろうかというのを、ちょっと積極的な、ちょっと飛んだ話でも出していただければ、ありがたいなというふうに思います。

じゃあ、あと 7 分、35 分まで休憩をしたいと思います。ありがとうございました。

<休憩>

藤山：それでは、最後のところ、民主主義のお話、あと何十分残ってるから、それでまとめましようと言って、まとまるとは、到底、思えないので。

ただ、もともと話ししてた、民主主義というのは批判となっているという部分について、相当、脅かされてる部分もあると思うんですね。

それと、中国の話が出てたんですけど、実は、私、中国に駐在してるときに、民主主義の理論をふっかけたことがある、優秀な党員に。そうすると、その優秀な党員は何て答えたかという、その当時、胡錦濤政権だったんで、今よりものが言えたんだと思うんですけど。それ、21 世紀になったばかりの頃だったんですけど。「それはね、藤山さん。今世紀中に中国共産党の中の民主主義を確立する。22 世紀中に中国全体の民主主義を確立する。このくらいの感じですかね」というのが、その優秀な党員の答えだったですね。今、明らかに民主主義を採用したら、この国はおかしなことになるということを最初に言ってるんで、多分、共産党に対して矛盾しない答えになってるんだろうと思うんですけど。まあ、でもそちらのほうは、漸進的にはいいんだろうけども、時間がかかると、こういう答えだったと思います。

今、ご案内のとおり、新型コロナの問題があつて。新型コロナの問題というのは、情報統制をしているから、初動が遅れたのではないかっていう議論が、中国の Twitter なんかにも出ていて、まあ、すぐ消されてるわけですけども。そういう議論になってる。これと民主主義が関係あるかっていうこともあるでしょうし、さっきの国民投票の話もあるでしょうし、民主主義っていうものは、この後、どうやって変容していくのかとか、変えられるのか、改良できるのかとか、いろんな話があるかもしれませんが、思いついたことを、考えたことを、この中のテキスト、課題図書の中で考えたことを、口に出して質問していただいても結構なんで、お願いしたいと思います。

7人全部、もう回らないかもしれませんが、時間の限り、いきたいと思いますので、挙手をまたお願いします。

それでは、今度、星野さんかな。

星野：JXTG エネルギーの星野です。ちょっと思いつきみたいなのところもあるんですけど、先ほどにちょっと関連をして、ポリュビオスが、1人支配と少数支配と民衆支配をバランスさせるというか、ことが大事だというふうにおっしゃってましたけど。その中で、グローバルを一つの社会と見たときに、民主主義の国があったり、エリートでやってる国があって、あともう本当に独裁政治をやってる国があって。それから逆にバランス、それぞれあったほうが、何ていうんですかね、世界としてうまく回る、逆に全部、民主主義にしちゃわないほうがいいっていう考え方って、あたりしないのかなって、ちょっと思いつきで思ったんですけど。いかがでしょうか。

宇野：面白い発想だと思います。ポリュビオスの循環政体論を受けてできたローマの理論を混合政体論といって、ミックスコンティチューションとか、ミックス... いろいろあるんですけども。これは一国を前提としてるために、今、おっしゃったように、それぞれの国が、それぞれ、民主制と、貴族制と、ある種の君主制をすみ分けるといふ発想が、基本的にはないと思います。ですから、国際的に、それがあって、それがバランスを取るといふのが成り立ち得るかっていわれると、直ちには、ちょっと分からないと思います。

ただし、先ほどの中国の話もありましたけど、やっぱり民主制って、本来、なかなか大国にはうまくはまらないってところがあると思います。これは、モンテスキュー以来の理論でして、一定程度の大きくなると、共和制や民主制は機能しないってのが、モンテスキューの理論でして。一定程度大きくなると、君主制になるか独裁制になるかだから、まあ、まともに機能する、ある程度、分権的な君主制くらいが一番いいかなっていうことを、彼は、モンテスキューは言ってます。

国のサイズっていうのは、結構、規定要因として大きいわけであって。世界の国々に、直ちに西洋諸国でつくった国民国家モデルの民主主義を前提にして、これを全部等しく当てはめるっていうのは、いささか政治学の傲慢に過ぎたのであって。現代のモンテスキューだったら、世界各国の条件に合わせて、今の段階で機能する、今のだから中国であれば、ある程度、独裁的な体制もやむを得ないって発想があり得るかもしれない。

しかしながら、それぞれいろんな国で、それぞれの政治体制を実験する中で、大枠でいえば、民主的な要素を育てる一方、常に付きまとうのは、1人の人が最終的に責任を取って決断をしなきゃいけないという要素も絶対残るとは思いますし、一定程度の少数エリート集団というのは、しっかりと存在するっていうのは、やっぱり重要な要素です。この三つの要素をそれぞれの国が、それぞれの形でバランスを取って、それぞれの国の条件に合わせて実験をしながら、どういう政治体制が機能するかっていうのを、今、実験している段階か

もしれません。その結果として、それぞれの条件に合わせて、こういうものが良くてって、世界的にはこういうふうに組み合わせていくとっていう道が見えてくるかもしれません。

いささか 20 世紀後半は、国の条件とかサイズとか抜きにして、みんな大体、西洋でモデルつくったような、国民国家モデルの民主主義でやっちゃおうってやったけど、やっぱそれはいささか無理があったなと思います。ですから、ある意味で、いろんな違う体制がすみ分けをすることによって、全体でバランスを取るという発想は、21 世紀においては、あり得るんじゃないかと思います。

藤山：ありがとうございます。

今の段階では、国単位で分けるんじゃなくて、国の中で、その度合いを変えていくっていうような感じで、全体的にバランスするっていうようなイメージになる。

宇野：これも難しくて、皆さん、ご存じの、覚えてらっしゃるか分かんないですけど、アントニオ・ネグリっていう人の『Empire』という本が、2000 年前後に大ベストセラーになりましたが、あれは世界レベルの混合政体をやろうという発想だったんですね。

それこそ、今はある種、アメリカの大統領みたいなものもいれば、グローバル企業があって、それから世界で働く労働者がいて、これが事実上、今の世界の混合政体だと。割とトップ 1 パーセントくらいの中央権力中枢と、グローバル企業群と、世の中のマルチと呼ばれるごくごく大衆。この人たちを、世界全体でバランスを取るっていう発想を、ネグリは取りました。当時は誇大妄想かと思いましたが、今のお話からいうと、意外と近いのかもしれない。ありがとうございます。

藤山：大変面白い質問だったと思います。なかなか国民国家の点数付けをするのは、エコノミスト・インテリジェンス・ユニットがデモクラシーインデックスというのを使って。大体、北欧の国が上のほうに、ウワーっと並んじゃうんですね。だから、もっと人口の多い政局は利かないし。あれはなぜなんだろうなという感じ。一つのモデルがあって、頭の中にはあって。選挙の投票率なんかも入ってるんですね。日本なんかは投票率低いんで、そこだけでも下がってきちゃう。

じゃあ、磯部さん、お願いします。

磯部：先ほどから、マスのデモクラシーがなかなか難しくなる。個人の意見がなかなか薄まっていってしまう中で、やはり自分の責任とか、コミットメントがなくなっていくとときに、先ほどちょっと藤山さんも触れられてましたけど、インターネットあるいは SNS が、個人でグローバルに自由に、かつマスに向かって発信できる時代にあって、今後、この民主主義というのは、何か大きく変容していく可能性があるのか。また一方で、中国のようにそ

ういったものを統制している国、ここ、うまくやっていると見るのか、ああいった大きな国の中で統制していくことが、ある意味、うまくいっているとすると、それもまた一つのインターネットというのが、一種の劇薬になりかねないのか。それを統制してるのかもしれないんですけど。何か、今の SNS あるいはインターネットの時代における民主主義の在り方、今後、何かご意見あれば、伺いたいなと思います。

藤山：湯浅先生のところで、一回、やったわけですけども、ぜひ宇野先生のお話も聞きたいですね。

宇野：これも、申し訳ありませんけど、あらかじめ申し上げると、私は答えが分からないので、出口を教えてくださいたいところではありますが。

振り返ってみれば、インターネット黎明期には、それこそアラブの春ではありませんけれど。今から思うと恥ずかしいです。e デモクラシーなんていう言葉も結構はやりまして。インターネットの時代には、むしろデモクラシーが発展するのではないかという、一種の期待感がありました。

先ほど来、申し上げているように、民主主義というものが、それまで発言権のなかった人に発言権を与え、その人たちの力の声が政治を動かす事態を民主主義ともし呼ぶならば、まさにアラブの春に象徴されるように、それまでであれば政治的発言権、あるいはその機会のなかった人々が発言し、かつそれを通じて新たなつながりをつくり、そして政治体制を覆すに至るというのは、まさに民主主義の夜明けというふうに思えたのが、ある種、インターネット第1期ではないでしょうか。

ところが第2期になると、今度は。

ちなみに言うと、第1期と第2期の間に、1.5期くらいというものもありまして。

私、仲のいいような悪いような微妙な関係にある批評家で、東浩紀さんという人がおります。ゲンロンという会社を自分でやっている面白い学者であり、企業家である人ですけど、彼は『一般意志 2.0』という本を書きまして。

ルソーの時代には、一般意志になんていうのは分からなかった。でもルソーの本を読んでいると、結構、数学的な比喻をたくさん使っているんですね。だから、ルソーは人々が思っている願いとか意志が世界、社会全体でどういう一般意志を形成するかというのを計るものがなかった時代に、ああいう議論をしたから、抽象的になった。

今の時代は、ネットを通じて、人々は日々自分の思い、利益、思考、感情を含めて、ある意味でいうと、ネット上にどんと流しているわけです。それがビッグデータとして集積されるわけであって、人々が無意識のうちに流しているさまざまな選好や思いをビッグデータとして集めた結果、社会全体として見ると、こういう一般意志がいるということ、数字で、数値的に証明することができるようになった。だから、ルソーの一般意志が、彼の生きた時代においては、あまりにも抽象的だったが、ついに今の時代こそ、一般意志が可視化される

時代が来たんだという本を、彼は書きました。『一般意志 2.0』という、今からすると、これはこれで、またちょっとやや楽観的過ぎた意見だったかなという気がしますけど、分かんではありません。

つまり、われわれは政治的な場以外でも、日々、それこそ Amazon なんかでいろんなものを買うことを通じて、自分たちの好みや価値観というものを、常に表出しているわけであって、それをビッグデータとして集積できる以上、そのようなところに、人々の思い、潜在的の可視化されてない思いをくみ取って、それを次の社会変革につなげるという意味では、まあ、東さんの言うこと、全く無意味ではないと思います。

そして今や、インターネット 2.0 というのは、むしろ逆でして、GAF A に象徴されるように、巨大プラットフォーム企業がビッグデータを集積する。その前に、ある意味でいうと、われわれは搾取されてる。われわれの情報というのを巨大なビッグデータをかすめる、ああいうプラットフォーム企業から、いいように利用されるし、その利用の条件も事実上、向こうから設定されていて、文句を言えない。やめることもできない。で、われわれの情報はだだ漏れして、それをさらに利用されてる。これこそ現代の搾取であるという議論も見られるようになりました。

さらには、先ほど来、出ている中国のように、究極の個人認証国家であって、行政組織は必ずしも十分に成長していない分、ネットを通じて、その個人が何を考え、どのように発言し、どのような社会的行動を取ったか。何を買ったかだけじゃなくて、どういう行動を取ったかまでが、全てがデータ上に認証され、それが事実上、その人の個人の資格認定に使われるという、それを中央権力がある意味でいうと利用できるという、ある種、デジタル独裁、デジタル専制みたいな社会も出てきて。今や IT やデジタル社会というのは、むしろ民主制ではなくて、専制政治、究極的に情報を独占したものが圧倒的な力を持つ、独裁体制と親和性が高いのではないかという議論に、今、なりつつありますね。皆さんもご存じのとおりです。

ただ、私はこれも一面的で、私はその次の段階があるんじゃないかと思います。つまり、やはりインターネットの持っている、全ての人に双方向的発言の機会を与える、そのための表現手段を与えるというのは、間違いなくデモクラティックです。

よく iPhone とかっていうのは、人々をデモクラタイズするっていう言い方しますよね。つまり、多くの人に何らかの発言の機会、何らかの意志表明の機会、何らかの自分の価値観を表明する機会を与えている。それを極めて安い、コストゼロに近い価格で、それこそ曲だつてつくれるし、いろんなもの、自分でメディアもつくれるようになった。

そういう意味でいうと、私はインターネットは本質的に、デモクラティックな要素を持ったものですので、今はこれが独占、専制のほうに向かっていますが、やがて私はインターネットの持っているデモクラティックな側面を違う形で組織化する動きが、第 3 段階で現れるのではないかという、いささか楽観的過ぎるかもしれませんが、私はそういう期待を持っております。

今、だから、あまりに楽天的だった第1期、非常にセンセイとITが近いのではないかと
いう悲観的な第2期を経て、次の第3期をどういうふうに展望するかが課題だと思っ
てます。

藤山：ありがとうございます。今のお話で、湯浅先生のときにやった議論をちょっと宇野先
生にご紹介すると、要するに、ヨーロッパは、やっぱりあくまでもヒューマンなプライバシ
ーを一生懸命守ろうとしている、ということを鮮明にしている。中国は、国が科学技術の酸
い全部取っちゃって、むしろ人民を指揮するのに使っちゃってる。プライバシーがなくな
っちゃってる。

でもアメリカは別のことが起こってるっていったときに驚かれたのは、アメリカはプラ
イバシーが脅かされてますよ、でも守れますよ、守るためにはお金がかかります。つまり、
プライバシーを財産権のうちの一つとして、整理しようとしつつあるんじゃないかってい
う議論になって。これ、結構、面白いなど、そのときに思ったことがあります。

宇野：面白いですね。

藤山：でも今のお話、まさに考えどころのお話かなという気がいたします。

他にいかがでしょうか。ちょっと途切れたら、私、実は前の打ち合わせのときに、オルテ
ガの話をごんざん入れてくださいと言った・・・。

宇野：すいません。笑。

藤山：というのは、オルテガっていう人は、経済と社会の両方またがって話をしてるって
いうこともあるし、彼自身の貴族的なおいもあって、彼が果たした役割っていうのは何なの
かなっていうのが、もう一回、整理を頭の中でできたらいいというふうに思っ
てまして。もし、コメントをいただければ、ありがたい。

宇野：幸か不幸か、今度、岩波文庫でオルテガの『大衆の反逆』が出ます。私、その解説
を、つい先日書いたものでして。そういう意味でいくと、絶好の質問をしていただいたとこ
ろでございます。

世の中のイメージとして、オルテガというのは、大衆批判、ある意味で高みのところに立
ったエリートとして、愚かな人々を批判してる本であると、しばしばいわれるかと思
います。

この人が、よくいわれる前提は、19世紀というのは、まだ有権者の数も限られていて、
結局、選挙権を持っているのは、ある程度、お金、財産があり、知識、教養もある人であ
って、一定の判断を持っているパブリックであった。公衆であった。ところが20世紀とい
うのは、ある意味でいう、誰も彼もが政治に参加する資格を持った結果として、教養もなけれ

ば、財産もない、判断力もない、むしろ付和雷同し、人々の言いなりになるような、そういう連中が大衆として政治に参加して、これが政治のとめどもない劣化をもたらしている。こういう図式で、ほぼオルテガを、『大衆の反逆』は説明されていたのではないのでしょうか。

しかし、今回、私、もう一回読み直してみると、なかなか面白いことを彼はたくさん言ってるなと思いました。彼は甘ったれたおぼっちゃんっていう言い方をするんですね。どういうことかっていうと、今、われわれがこの文明社会に暮らしているのは、誰かがどこかでこのような文明をつくってくれてるんだ。そのために、誰かが維持するために、すごい努力をしてくれてるんだ。それなのに、われわれはその文明を、われわれが享受している文明を誰がどこでつくり、さらにはそれを維持するために、誰がどこでコストを払ってるかなんか、一切、考えないで、自分の身の回りだけで自己完結して、好き勝手なことを言っていればいい。

つまり、利益は享受したいが、その利益をもたらしてくれている文明を誰がつくり、そのコストを誰が払ってるか、それをどうやって維持していけばいいかってことに関しては、何にも考えていない。気が付いてみれば、親の財産があって、ぬくぬくと享受するだけで、どうやったら、その財産をつくり、さらに今後、維持、発展させていけるかを考える努力すらしてない。われわれはみんな甘ったれたおぼっちゃんじゃないか。

それこそ、さっき言ったネットの道具を使って、非常に力強くなってるように見えて、そのネット全体がつながって、社会全体がどういうふうになり、社会全体を維持し、再生産するためのコストを誰が払ってるか。技術や文明が発展するためには、やっぱりそれを誰かが常に努力して、維持、発展していかなければいけないのに、それをちゃんと、考えているのか。

オルテガは言います。専門家こそ、最もあしき意味での大衆である。その心は何かというと、現在の専門家というのは、とめどなく専門分化している。自分の分野のことは知っているかもしれないけれども、その外に出ていくと、一歩外に出ていくと、さっぱり知らない。誰も文明はもちろんのこと、宇宙の原理。本来、科学者というのは、宇宙の原理を考えるものであろう。ところが、今の科学者の中に、専門を分化した科学者に、誰一人、宇宙の原理を考えてる者なんかいないではないか。これは、はっきり言って、科学者としてみると、ものすごい後退であって。すごい専門で、狭い分野しか知らないにもかかわらず、自分の専門外の分野に関して、いけしゃあしゃあと偉そうなことを口を利くのが、最もあしき専門家であって、こういう専門家というのは、大衆以外の何者でもない。現代において、最も大衆的なのは、いわゆる専門家であるっていう、なかなか痛快なことを言っております。

だから、僕はあれは自己批判の本だと思うんです。われわれっていうのは、ある種、すごく細分化されるところで生きていて、確かに文明の一番最先端の部分を楽しんでいるけれど、それが何によって生まれているかを理解していない。さらに、この文明なり、人々の生活っていうのは、誰がどこで支えているかっていうことも、しばしば忘れてしまう。それはやはり誰かが維持しなきゃいけないし、そのためには、今、この瞬間だけに知恵がとどま

ったら、絶対駄目なのであって、歴史と宇宙、この二つに関する幅広いものの視野っていうものがないと、決して文明は維持できないのであるが、今のわれわれというのは、極端に視野が狭くなってきているっていうのは、私はあれは自分自身含めて、自己批判の書として読むと、実になかなかよく当たっている本だなと思って、21世紀の今日、世界中みんな大衆になってしまった。そのときに果たして文明は維持されるのだろうかという議論として見ますと、私は、非常にあれは示唆的で面白い本だと思いました。

かつ、その上でヨーロッパというのが、既に力を失いつつある。ヨーロッパが世界をリードするだけの理念を持たなくなり、アメリカとソ連が出てきて台頭し、さらに次々に新しい国が発興する中で、理念がなくなったヨーロッパは、どうやって世界を引っ張っていいのか。世界を引っ張るに足る理念、それは自由主義しかないだろう。でも、どうやったら、その自由主義を非ヨーロッパ圏に対して説得させることができるのかという意識を、非常にオルテガは持っていました。

先ほど来、21世紀、もし生きていたら、中国の人に、もし自由民主主義を理解してもらえたらどうしたらいいか。中国の人に自由と民主主義を理解し、それを採用してもらえなかったら、多分、未来はないでしょう。しかし、それを果たして説得するだけの論拠と力はあるだろうか。オルテガがもし今日生きていたら、そう思うだろうと思いました。

藤山：なるほど。ありがとうございます。1930年ですね、ちなみに彼が書いたのは、1930年。民主主義と科学技術のおかげで、自分たちは、なんか親の世代よりも進歩したような顔してるけれども、実は教養の面では、19世紀の親の世代の人たちに比べたら、われわれは相当劣った野蛮人になって、都会の中で、裸でさまよってるんだってなことを書いてあるわけですね。なかなか面白い人だと思います。

これは実は、アスペンを立ち上げたうちの1人でして、それをちょっと私、興味を持って読んだりしてるんですけども。

ということで、きょうは民主主義の話を経史的にずっとさかのぼってくることによって、現在の民主主義が持っている問題というのが、何となく正義的な感じで身に迫ってくるようなところがあったかと思います。きょう、非常に長くお話をして、われわれとも付き合っていたいただいた宇野先生に、皆さんももう一度大きな拍手をしていただきたいと思います。

では、きょうはここまでにしたいと思います。次回は、生命科学の話ですけども、コロナウイルスによっては、いろんな通知が行くかもしれませんが、今のところ、何とか開催できるように祈っております。きょうは本当にありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

(了)